

フジフィルム スクエア

2022年度

活動報告書



2023

FUJIFILM SQUARE

フジフィルム スクエアのこれまでの活動

富士フィルムは創業以来「写真文化」を守り育てるため、写真の素晴らしさ、楽しさ、感動、そして写真を残す大切さを伝える活動を一貫して行ってきました。開館以来、延べ1,600回以上の写真展を開催し、800万人におよぶ幅広い年代の方々にご来館いただいています*1。フジフィルム スクエアに関連する活動の歴史をご紹介します。

※1 2023年3月時点



1957

富士フォトサロン開館

プロ、アマチュアを問わず優れた作品を発表する場として、フジフィルム スクエアの前身となる富士フォトサロンを銀座に開館しました。

2007

フジフィルム スクエア開館

東京ミッドタウン(六本木)への本社移転と同時に、複合型ショールーム「フジフィルム スクエア」を開館しました。「富士フォトサロン」から改名した「富士フィルムフォトサロン」に加え、写真の歴史とカメラの進化を学べる「写真歴史博物館」などを併設。



2014

フジフィルム・フォトコレクション収蔵

創立80周年を機に、幕末・明治から現代に至る日本の写真史を飾る101人の写真家選りすぐりの1枚を、「フジフィルム・フォトコレクション」として収蔵。これらはフジフィルム スクエアをはじめ全国の美術館でも展示され、その芸術的価値をお伝えするとともに、日本写真史の体系的な理解に役立てていただいています。

2017

開館10周年記念写真展の開催

フジフィルム スクエアの開館10周年を記念し、写真の「歴史」・「今」・「明日」という3つのテーマで、「写真の過去・現在・未来」を発信する12の特別企画展を1年間にわたり開催しました。

10th
ANNIVERSARY



2018

メセナアワード2018

優秀賞「瞬間の芸術賞」受賞

フジフィルム スクエアの活動が、企業メセナ協会*2が主催するメセナアワード2018 優秀賞「瞬間の芸術賞」を受賞。長年にわたり、写真作品を発表、鑑賞する場を提供し、人と人の心がつながる感動体験を広め、写真文化の普及と発展に貢献していること、時代を超える価値を持つ貴重な作品の展示機会を作り、記録性や芸術性という写真の本質を、時代に合った内容で発信し、写真を文化財として継承・育成する可能性を追求し続けていることを評価いただきました。

※2 企業による芸術文化支援(メセナ)活動の活性化を目的に1990年に設立された、日本で唯一のメセナ専門の中間支援機関

「こころ彩るところ」フジフィルム スクエアは、
時代の変化に適した形で、写真文化を未来へと絶えず、守り育み続けます。

施設コンセプト



「写真の持つ力に感動しました」「思わず私も撮りたくなりました」
訪れたお客さまから、そんなたくさんのお声をいただいています。

フジフィルム スクエアはこれからも、
価値ある作品との出会いを通じて、
人と人が心豊かにつながる場でありたいと考えています。

例えば、見応えあるオリジナルプリントを、思う存分鑑賞する。
出展者の、作品作りの背景や意図を理解する。
写真家の心に共感し、一緒に見ている人と気持ちを分かち合う。
歴代のカメラや写真の歴史を知り、好奇心の羽根を広げる。

この場所で生まれる出会いや感動で、お客さまの心が鮮やかに彩られ、
その体験が色褪せずに記憶に残ること。それがフジフィルム スクエアの願いです。

“ところ彩るところ”

私たちはこの言葉を胸に、さまざまな活動を通じて写真の素晴らしさや楽しさ、
そして残す大切さを伝え、写真文化の発展と心豊かな社会の実現に貢献していきます。

FUJIFILM SQUARE

ご挨拶

フジフィルム スクエアは、富士フィルム株式会社東京ミッドタウン(東京都港区)本社にある複合型ショールームです。優れた作品の発表の場「富士フィルムフォトサロン」、写真の歴史とカメラの進化を学べる「写真歴史博物館」、最新の写真関連商品を試せる「タッチ フジフィルム」、化粧品・サプリメントなどの当社ヘルスケア商品を取り揃えた直営店「ASTALIFT 六本木」で構成されています。2007年の開館以来、2022年度までに延べ1,600回以上の写真展を開催。写真を通して、「撮った人＝出展者」の気持ちを「見た人＝来館者」に伝え、ご来館いただいた800万人におよぶ方々のところを彩ってきました。

富士フィルムは1934年の創業以来、写真フィルム事業で培った幅広い技術を蓄積・進化させ、価値のあるイノベティブな製品・サービスを提供することで、「人々の豊かな生活のために富士フィルムにできること」を追求してきました。その中で当社はフジフィルム スクエアが取り組む「写真を通じて人と人の心をつなぐ活動」を、心の豊かさや人々のつながりに貢献する活動と位置づけています。

フジフィルム スクエアは2022年度、新型コロナウイルス感染防止の対策を講じながら1年で86本の写真展を開催しました。

時代を超える普遍的な価値を持つ名作をはじめ、現代を生きる作家の思いを伝える作品、新たな時代を担う若手写真家のみずみずしい感性があふれる作品など、バラエティー豊かな作品をご紹介します。

若手写真家の作品発表の場を提供する若手写真家応援プロジェクト*1の新部門として「ポートフォリオレビュー*2/アワード」を開催。45歳以下の写真家・写真家を志す方から作品を募集し、レビュワー*3による事前審査、レビュー、ファイナリストレビューを経て決定したアワード受賞者4名による「原石が輝く」写真展を開催しました。

さらに、写真展の楽しみ方の幅を広げる企画にも取り組み、写真と文章を見ながら、さまざまなものを探さくれば絵本『ミッケ!』をテーマにした写真展や、「リラクゼーション」をテーマとし、写真展会場に森の中でのキャンプをイメージした空間をつくり出すことで、視覚に加え、音や香りを用いた“体感型”の写真展「まったり夜キャンプ」を開催。日ごろは写真に触れる機会が少ない方や、フジフィルム スクエアに初めてご来場いただいた方など、多様な方々に写真を楽しんでいただきました。

富士フィルムは、これからもフジフィルム スクエアでの感動を呼び起こす写真展示や、思い出をカタチにする写真関連製品・サービスの提供などを通じ、心の豊かさ、人々のつながりに貢献していきます。

*1.フジフィルム スクエアは、若手写真家が写真展を開催するための制作費などを支援する「写真家たちの新しい物語」を若手写真家応援プロジェクトとして2013年に立ち上げ、2023年7月までに合計36回開催しています。

*2.作品講評会(以下レビュー)

*3.講評する講師

CONTENTS

企画写真展レポート

FUJIFILM SQUARE 企画写真展

01	「写真家・平間至の両A面」 ～アー写(アーティストの写真)／エー写(営業写真館の写真)～	… 06
02	鈴木一雄写真展「 ^{こゑ} 音をきく」 ～Listening to the Spirits in the Wild～	… 08
03	「生き物たちの地球」写真・文 前川貴行	… 10
04	かくれんぼ絵本『ミッケ!』シリーズ刊行30周年記念 『ミッケ!』にはいるう ～ウォルター・ウィック『チャレンジ ミッケ!』の世界～	… 12
05	岡本洋子写真展「心模様、花もよう」	… 14
06	中村武弘写真展「海」	… 15
07	「まったり夜キャンプ」～五感ほどける写真鑑賞～	… 16

富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト

[写真家たちの新しい物語]

08	松井一記写真展「飛行千景」 —飛行機の織りなす幾千もの情景—	… 17
09	上出俊作写真展 「陽だまり レンズ越しに見つめた10mmの海」	… 18
10	サコッティ写真展「ジワリズム」	… 19
11	草薙 裕 写真展「水を伝う」	… 20

[ポートフォリオレビュー／アワード 2022]

12	ポートフォリオレビュー／アワード 2022	… 21
----	-----------------------	------

富士フィルムビジネスイノベーション 企画写真展

13	ARTBOOK INNOVATION —デジタルプレスが拓く写真とアートブックの新機軸—	… 24
14	Jリーグ30周年記念企画 世界の舞台で活躍するJリーガーたちの雄姿	… 25

富士フィルム 企画写真展

15	GFX Challenge Grant Program 2021 ～Make Your Next Great Image～	… 26
16	「見つかる! あなたのプリントデイズ」展	… 28
17	10 Years of X Mount	
18	0.025 second ～待望のフラッグシップ機“X-H2S”で撮影する秒間40コマの世界～	
19	小平尚典「JAPAN TRAIL」写真展 by GFX50S II	… 29
20	Jay Hirano 「F1・富士フィルムで撮るヨーロッパでの戦いの記録」写真展 by X-H2S	
21	～Life in Detail～ X-H2作品展	
22	X-T5作品展「人」	… 30
23	FUJIFILM Xシリーズ作品展「マクロの世界」	
24	清水大輔タイムラプス展「そこにある光」	
25	「写真とポスカ展」 ～ハーフサイズプリントとポスカで、毎日にもっと彩りを～	… 31
26	野辺地ジョージ写真展 「Roads to Denaliー デナリへの道」	

FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展

27	写真家エリオット・アーウィット作品展 「観察の美学 筋書きのない写真たち」	… 32
28	植田正治写真展「ベス単写真帖 白い風」	… 33
29	人間写真機・須田一政 作品展「日本の風景・余白の街で」	… 34
30	鈴木 清 写真展「天幕の街 MIND GAMES」	… 35

写真展開催リスト

当社が主催・共催・協賛する企画展38本(写真家たちの新しい物語4本、写真歴史博物館の企画写真展4本含む)、公募展48本、合計86本

施設概要レポート

… 36

… 38

「写真家・平間至の両A面」
～アー写(アーティストの写真)／エー写(営業写真館の写真)～

2022年6月10日(金)～6月30日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2・ミニギャラリー



展示概要

1990年代から今日まで、タワーレコードのキャンペーン「NO MUSIC, NO LIFE.」をはじめとする数多くのアーティスト写真を撮影し、「音楽が聴こえてくるような躍動感あるポートレート」で写真界に新しいスタイルを打ち出した平間 至氏。宮城県塩竈市の写真館に生まれた平間氏にとって、さまざまなメディアへの掲載のために撮影したアーティスト写真(アー写)と、2015年に東京で開業した営業写真館「平間写真館TOKYO」で一般の方々を撮影した写真(エー写)は、どちらもが主役であり、レコードに例えれば「両A面」といえます。

平間氏が「エー写」の役割を再認識する契機となったのが、塩竈市に大きな被害をもたらした2011年の東日本大震災でした。平間氏は地域の復興支援活動の中で、写真館で撮影され、震災後まで残った家族写真やハレの日の写真が、多くの方々に大切にされていることを目の当たりにしたことで、被写体であるお客さまに心から喜んでほしい、家族の記憶を紡ぐことができる「エー写」の力を改めて感じたといいます。

本展は、平間氏が写真家として30周年を迎えた2020年、震災から10年の節目となった2021年を経て、それまでに撮影した膨大な写真から作品を精選。アーティスト写真と営業写真館の写真223点にタワーレコードのキャンペーンポスターやフライヤー62点も加え、氏の音楽と写真への感謝が込められた、約30年の集大成を堪能いただく写真展としました。

展示作品点数

223点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：タワーレコード株式会社、平間写真館TOKYO
後援：港区教育委員会
企画：コンタクト
デザイン：長尾敦子
プリント制作：プロラボ クリエイト

販売物

- ・写真展図録「Thank you for the photographs! 平間 至1990-2022」(トゥーヴァージンズ)
- ・ポストカード8枚セット

Web公開動画

平間 至氏と写真展企画制作担当 佐藤正子氏による対談動画
「写真家 平間 至 × 企画制作 佐藤正子」



主要メディア掲載

新聞：朝日新聞(6月14日)／写真・カメラ紙(誌)：コマーシャル・フォト(6月15日)、CAPA(6月20日)、フォトコン(6月20日)／その他雑誌：Stereo(6月19日)／Webサイト：グノシー、antenna、Yahoo!ニュース、読売新聞オンライン、MdN、livedoor ニュース

来館者数

合計21,295人(21日間)

実施レポート

音楽から多大なインスピレーションを受け、「僕にとってカメラは楽器」と語る平間氏。アーティストとエネルギーを交換し、共に躍動しながら撮影することで、彼らの本来の魅力を引き出し、写し取ってきたのが「アー写」です。本展ではその中から、時代を代表する歌手やバンド、タレント、ダンサー、俳優、映画監督、格闘家など、幅広いジャンル・世代の約100組の写真を展示。会場には、平間氏の「アー写」ファンの方々が多く訪れました。

もう一つの「A面」である「エー写」においても、平間氏は、撮影時に表情やポーズを指示することなく、即興的な相互のコミュニケーションでお客さまの気持ちを「解放」し、自然な魅力を引き出してきました。本展では、ヴェールを踊らせ弾けるような笑顔を見せる花嫁の姿や、夫婦や親子、三世代の家族を自由な動きと飾らない表情で捉えた記念写真など、約60組の写真を展示しました。来館者からは、温かく包み込むような感性で一人ひとりの魅力を捉えた「エー写」に、思いがけず共感を覚えたという声が数多く聞かれました。

ジャンルの異なる「両A面」の展示は、撮る側・撮られる側が演奏のようにセッションして作り上げる平間氏の写真の力をあらためて鮮明にし、多くの方々に体感いただく機会となりました。

本展の会期中、20代をはじめとする幅広い世代の2万人を超える方にお越しいただきました。館内のアンケートでは、本展を目的に訪れた来館者の95%が「また来たい」と回答されたほか、平間氏の作品の世界に対し、多数の賞賛が寄せられました。



来館者の声

一人ひとりの命がキラキラしているようで涙が出て、ずっとこの場にいたくなりました。見ている人たちの幸せそうな顔を忘れないでいようと思います。

大きく引き伸ばした写真を体感することで、平間さんの写真から音やリズムを感じました。

「それぞれが自由に動いて自由な表情をしている瞬間にオリジナリティーがある」、こういう家族写真があつていいんだと思いました。

さらに写真への愛が深まりました。そして「家族写真を撮りたい」と思いました。

どの写真も今にも動き出しそうで、温かい写真ばかりでした。写真をゆっくり眺め、感動を覚えたのは初めてでした。

何となく立ち寄ったのですが、気がつくといくつ時間もかけて見ていました。写っている人の息遣いや音楽を写真から感じました。

写真は音楽と同様に人の感情を豊かにするものだなあと深く実感しました。

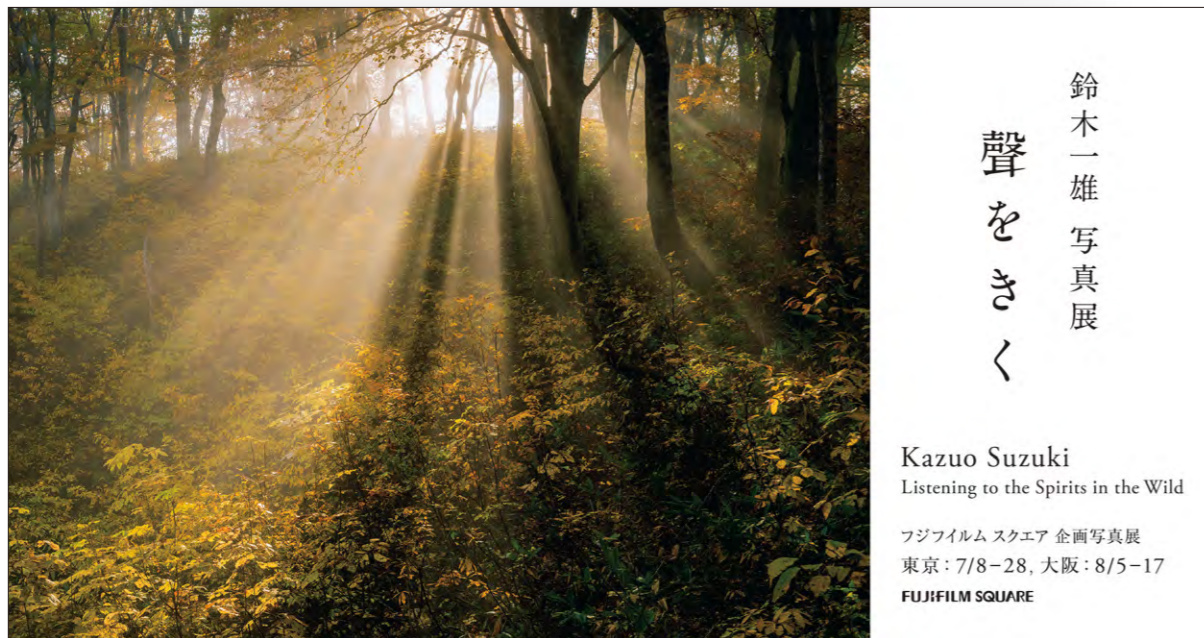
誰かの永遠の瞬間も私のまぶしい瞬間になりました。

動画視聴者の声

営業写真家の私は「一般の方にとっての記念写真の大事さ」を信じて37年間営業写真を撮ってきました。本展でその大事さを改めて感じました。

鈴木一雄写真展「^{こえ}聲をきく」～Listening to the Spirits in the Wild～

2022年7月8日(金)～7月28日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2・ミニギャラリー



鈴木一雄
写真展
聲をきく

Kazuo Suzuki
Listening to the Spirits in the Wild
フジフィルム スクエア 企画写真展
東京：7/8～28、大阪：8/5～17
FUJIFILM SQUARE

展示概要

日本を代表する自然写真家・鈴木一雄氏は、1953年、福島県に生まれ、中学を卒業して鉱山技師となり、大学進学、地方公務員を経て、1985年頃から風景写真の撮影に傾注。1995年、42歳にして本格的に写真家として活動をスタートさせるという、異色の経歴を歩んできました。物言わぬ自然界の風景や動植物でも、「存在と思い」に心を向け耳を傾ければその「聲」は誰にでも聞くことができると信じ、自然界の被写体が発するさまざまな「聲」を五感で受け止め、そのあるがままの姿を捉えるという独自の哲学で、多くの作品を撮り続けています。

また、「被写体が発する美しさである『美の聲』のみならず、『環境(風土)の聲』『歴史の聲』『生命の聲』を受け止め、写真に表すことを心掛けています」と述べています。例えば「福島県の桧原湖で撮影した作品『湖畔の鳥居』は、景観の美しさだけでなく1888年に磐梯山が噴火し、大勢の命が奪われたという『歴史の聲』『風土の聲』に耳を傾けたからこそ撮れた一枚でした」といいます。

本展は、デビュー作にして大きな反響を呼んだ写真集『裏磐梯』掲載作品をはじめ、自然の「聲」と向き合ってきた鈴木氏の半生を物語る代表作81点を、銀写真プリントで展示しました。

展示作品点数
81点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
企画：株式会社風景写真出版
デザイン：林 琢真デザイン事務所
プリント制作：写真弘社

販売物

鈴木一雄「聲をきく」(風景写真出版)

Web公開動画

鈴木一雄氏が語る写真展開催記念動画
前編「“聲”をきく」
後編「自分史つづり」



主要メディア掲載

新聞：朝日新聞(7月6日)、読売新聞(岩手、宮城、青森、新潟、栃木、埼玉、山梨、静岡、7月21日/山形、群馬、7月22日)／写真・カメラ紙(誌)：CAPA(6月20日)、隔月刊風景写真(6月20日)／Webサイト：ORICON NEWS、グノシー、47NEWS

来館者数

合計16,173人(21日間)

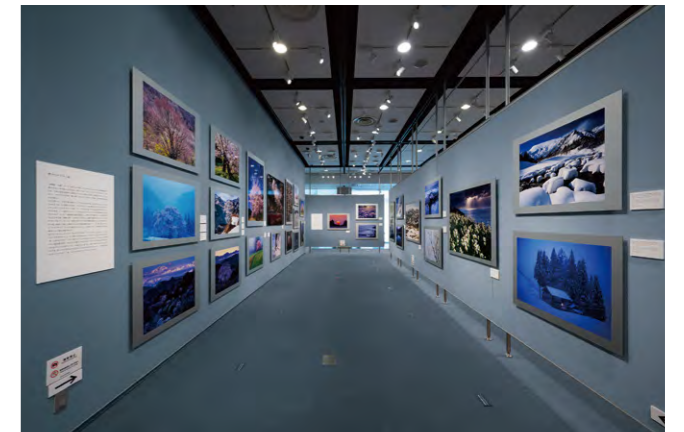
実施レポート

本展は、鈴木氏が富士フィルムのカラーリバーサルフィルム「フジクローム」を使って撮影した90年代の作品から、ラージフォーマットセンサー搭載のミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM GFX100S」で撮影した最新作までを、大サイズの銀写真プリントに仕上げて展示し、鈴木氏の自然写真の深みと迫力を存分に表現しました。

会場の展示は、鈴木氏が人生の各ステージで発表した作品について、その時その場所の自然や風景に何を感じ、どのように受け止めたのかということに焦点を当てて構成しました。自然写真家・鈴木一雄の誕生のきっかけとなり、当地を一躍有名にした代表作「裏磐梯」。それまであまり知られてこなかった、冬の湿原の表情を鮮烈に捉えた「尾瀬」。鈴木氏がライフワークとして四半世紀にわたり精力的に追い求め、写し続けている全国の多彩な「桜」。さらには、撮影範囲を日本全域に広げた近作の「列島シリーズ」。これらの作品を鈴木氏が奥深い言葉でつづったキャプションと共に展示したことで、氏の半生が「自分史」として浮かび上がる写真展となりました。

来館者からは、鈴木氏の人生観や撮影哲学が伝わる展示を評価いただき、感銘を受けたという声が多く寄せられました。本展を目的に訪れた来館者の95%が「よかった」、97%が「また来たい」と回答。複数の全国紙でも紹介され、大きな反響をいただきました。

また、本展開催にあたりWebサイトと会場で公開したインタビュー動画で鈴木氏は、独自の撮影哲学を持つに至った経緯などについて明かしました。この動画は、美しさのみを追い求めるのではない、鈴木氏の新しい自然写真の視線に来館者がより深く共感する手がかかりとなりました。



来館者の声

本当に自然の聲が聞こえてくるような気がしました。そして、お人柄を感じる素敵な写真でした。

撮影した場所の空気感と音(聲)が想像できました。

作品に神々しさを感じました。

キャプションも楽しく読みました。より深い作品理解にもつながり、良かったです。

自然が語りかけてくるような写真の風景、自然の色の美しさに心を癒やされました。

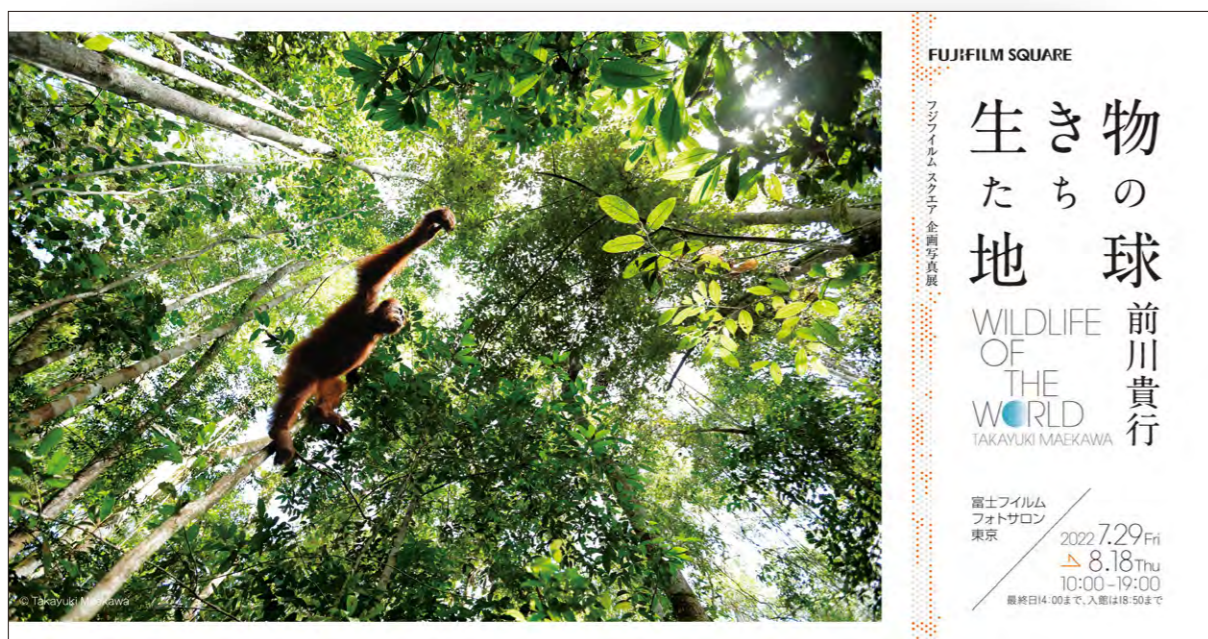
写っているもの全てが計算しつくされた美しさだと感じました!

動画視聴者の声

奥深いお話でした。ありのままの自然が発する聲を受け入れることで、大切な命が生きる、美を超越した作品になっているのだと感じました。

「生き物たちの地球」写真・文 前川貴行

2022年7月29日(金)～8月18日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2・ミニギャラリー



展示概要

アジア・北米・中米・アフリカ・オセアニアの多種多様な環境で生きる動物たちの姿を、20数年間、撮り続けてきた動物写真家・前川貴行氏。動物を人間本位の物差しで測ることなく、彼らとの対等な関係性を意識して撮影された作品は、動物たちの驚くほど無邪気な表情やしぐさを捉え、ある時には圧倒的な迫力を持ち、見る者に強い印象を残します。

本展は、前川氏が朝日小学生新聞に連載する「生き物たちの地球」で紹介された写真を中心に、世界の野生動物を撮影した96点を、迫力あふれる大判サイズの銀写真プリントで展示しました。

出会った動物、特にその個体の持ち味を伝えることを大切にしているという前川氏は、動物たちと互いの存在を認め合う時間を過ごし、相手に自分を受け入れてもらうことを心掛けて撮影に臨んでいます。本展では、北米でハクトウワシの子育ての様子をそっと見守りながら足かけ3か月間撮影を続け、彼らの自然な表情を捉えた作品のほか、トラやアメリカバイソン、オランウータンなど、警戒心の強い動物の意外な行動や面白い表情を捉えた作品も披露されました。

また、陸だけでなく、海のクジラやイルカ、川の魚などの撮影にまでフィールドを広げてきた前川氏の写真を通して、生き物たちのリアルティや美しさ、驚くほど多様な営みを伝えました。

展示作品点数

96点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：朝日学生新聞社、日本写真家協会、日本動物園水族館協会、港区教育委員会、名古屋教育委員会、札幌市教育委員会、大阪市教育委員会
監修：日橋一昭（那須どうぶつ王国 教育・普及啓発プロデューサー）
企画：高橋佐智子（Shishmaref）
デザイン：富澤祐次
プリント制作：アロラボ クリエイト

併催イベント

- 夏休み自由研究プログラム「生き物たちのふしぎ」
- 小中学生向け動物クイズ「生き物たちの地球」を配布
- 朝日小学生新聞「新聞のテンプレート台紙」を配布
- 朝日学生新聞社「新聞の作り方」の動画・説明パネルを設置

販売物

- 「生き物たちの地球1」（朝日学生新聞社）
- 「火の山にすむゴリラ」（新日本出版社）
- 「SOUL OF ANIMALS」（新日本出版社）
- 「しまふくろうの森」（あかね書房）
- 「creation」（新日本出版社）
- 「GREAT APES」（小学館）※著者はいずれも前川貴行
- ポストカード（32種）

Web公開動画

朝日小学生新聞編集部 猪野元 健氏による
前川貴行氏と写真展監修者 日橋一昭氏へのインタビュー動画
前編「動物写真・撮影のお話」
後編「展示作品・動物の生態のお話」



主要メディア掲載

新聞：朝日新聞（8月2日）、朝日小学生新聞（7月29日、8月14日）／Webサイト：エキサイトニュース、MdN、グノシー、デジカメWatch、livedoorニュース、CAPA CAMERA WEB

来館者数

合計15,957人（21日間）



実施レポート

「雨・風・太陽が土壌を肥やして植物や陸の生き物を育み、森の養分は川から海へ注ぎ水の生き物を育む」——。本展では、前川氏が撮影で体感してきたこの壮大な地球の循環を、陸・海・空の多彩な生き物の写真によって表現。また、「日本の動物も多様性に富んでいることを知ってもらいたい」という前川氏の思いから、ニホンザルやツキノワグマ、サケ、絶滅危惧種のタンチョウやニホンカモシカといった日本の動物の写真もセレクトし、彼らが暮らす環境までを含めて、その生き生きとした姿を感じていただける構成としました。

前川氏が現地で見えた色や空気感にまでこだわって銀写真プリントで再現し、動物の世界に入り込んだような臨場感のある作品の数々に、来館者からは、本来は出会えない動物たちの素晴らしい表情を見ることができたことへの興奮や喜びの声が多数寄せられました。本展を目的に訪れた来館者の96%、全来館者の92%が「よかった」と回答するなど、多くの方にご満足いただくことができました。

また、フジフィルム スクエアが毎年夏に取り組んでいる「自由研究企画」として、「生き物たちのふしぎ」を同時開催し、前川氏と写真展を監修した那須どうぶつ王国 教育・普及啓発プロデューサーの日橋一昭氏が動物の生態について対談する動画の上映などを実施。SDGsや生物多様性について「生き物側の目線」から考えるきっかけとしていただくことを目指しました。会場には、子どもたちやご家族の姿が多く見られ、前川氏は、会場でも子どもたちの質問に丁寧に答え、熱心に語り合っていました。

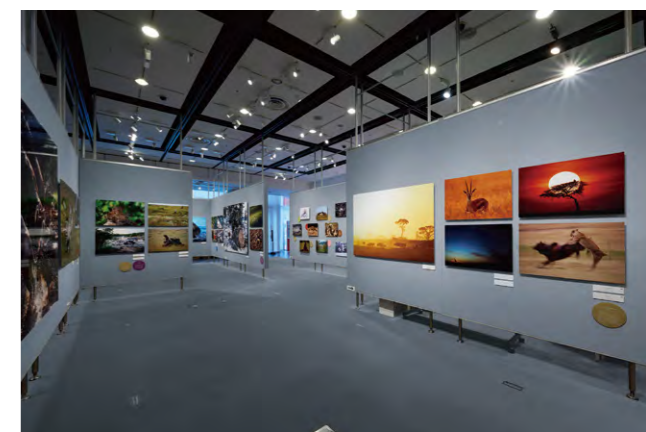
フジフィルム スクエアは、今後も子どもたちが多様な分野の写真やプロフェッショナルの方々に触れられる企画を通して、子どもたちの好奇心を養い、将来の夢を見つけるきっかけとなるような機会を提供していきます。

来館者の声

- 動物の息遣いが聞こえてきそうな素晴らしい写真展でした。
- 生き物たちの写真が素晴らしかった。大きく引き伸ばした写真は印刷で見るのと違ったものに見える。
- 生き物たちが迫ってくるような緊張感を感じました。
- 小学生にも楽しめる工夫があり、良かったです。
- 子どもたちが自然や動物に触れる機会が減っている中、写真展で珍しい生き物の貴重な瞬間と接することは、人間が生き物と共存していることを感じる良い機会になると思います。
- 絶滅危惧種の動物について知ることができました！
- 迫力があってカッコよかったです。
- 動物と自然が一体となった写真に感動しました。
- 人間も自然の中のほんの一部であることを改めて認識した。

動画視聴者の声

- 切り取られた瞬間の背景にあるストーリーが大変興味深かったです。写真展で、被写体との距離感を想像しながら鑑賞したいと思います。



かくれんぼ絵本『ミッケ!』シリーズ刊行30周年記念

『ミッケ!』にはいろいろ ~ウォルター・ウィック『チャレンジ ミッケ!』の世界~

2022年9月23日(金・祝)~10月13日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2



展示概要

1991年にアメリカで、翌1992年に日本で出版されたかくれんぼ絵本『ミッケ!』は、2022年で国内創刊30周年を迎え、シリーズの国内累計943万部を突破。精巧なジオラマの中に隠されたさまざまなものを探していく、大人も子どもと一緒に楽しめる大人気の絵本です。おもちゃや模型、アンティーク小物やぬいぐるみ、石や木の実など、たくさんのアイテムが並び絵本内のビジュアルは、作者のウォルター・ウィック氏が手作りジオラマを制作、レイアウトし、それを撮影した写真によるものです。

本展は、『ミッケ!』シリーズの『チャレンジ ミッケ!』第1巻~11巻に収録された作品の中から12点を、幅3mを超える銀写真プリントで展示。写真と文章をセットで見ながら、さまざまなものを探すという本来の『ミッケ!』の楽しみ方はもちろん、超特大サイズの銀写真プリントの迫力と表現力によって、まるで実際に『ミッケ!』の世界に入りこんでしまったような体験ができる写真展としました。また、フジフィルム スクエアオリジナルの立体展示コーナーを設け、来館者がそこで自由に写真を撮影、その写真を使ってご自分で「探しもの」を設定してオリジナルの問題を作って楽しんでいただくなど、参加型の試みにも挑戦しました。

展示作品点数

12点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：株式会社小学館
後援：港区教育委員会
デザイン：三田村邦亮
プリント制作：プロラボ クリエイト

販売物

- ・ウォルター・ウィック(著)、糸井重里(翻訳)『チャレンジ ミッケ!』11種(小学館)
- ・ウォルター・ウィック(著)、糸井重里(翻訳)『ミッケ!』シリーズ ポケット版BOX(小学館)

Web公開動画

かくれんぼ絵本『ミッケ!』作者 ウォルター・ウィック氏と
翻訳 糸井重里氏からのメッセージ動画



主要メディア掲載

テレビ：「ノンストップ!」フジテレビ(9月21日) / 新聞：東京新聞(9月20日)、読売中高生新聞(9月23日) / その他雑誌：月刊MOE(9月2日)、週刊文春(9月15日)、モノ・マガジン(9月16日) / Webサイト：gooニュース

来館者数

合計31,807人(21日間)

実施レポート

本展は、『チャレンジ ミッケ!』の出版元である小学館と、作者のウィック氏にご協力いただき、日本での創刊30周年という年に開催することができました。幅3mを超える超特大サイズの銀写真プリントによる写真展示は、ウィック氏にとっても、フジフィルム スクエアにとってもこれまでにない試みでした。開催にあたりウィック氏からは、「独創的な方法で展示できることに大変興奮しています。写真作品の中での探しものや、作品から派生して作られた素晴らしい立体展示により、作品世界へ没入したような体験を楽しんでほしいです」というコメントが寄せられました。また、銀塩フィルム(11点)、ラージフォーマットセンサー搭載のミラーレスデジタルカメラ[FUJIFILM GFX 50R](1点)で撮影された作品を、超特大の銀写真プリントで美しく引き伸ばしたことにより、ワクワクする『ミッケ!』の世界をより迫力をもって伝えることができた、出版関係者の方々にもご評価いただきました。

会場において特徴的だったのは、10代・20代をはじめとする大勢の若年層の方々にご来館いただいたことです。幼少期に『ミッケ!』を読んでおり、会場でその頃に戻ったような気持ちで探しものを楽しんだという感想が数多く寄せられました。中には12作品の探しものを全て見つけるために、約3時間滞在された方など、多くの来館者に『ミッケ!』の謎解きを熱心楽しんでいただきました。

また、会場で来館者に記入いただけるウィック氏へのメッセージカードを用意したところ、3,400件以上もの温かい言葉が寄せられ、ウィック氏が「これほどたくさんのメッセージをいただけるなんて、驚きました」と感嘆するほどの反響となりました。館内でのアンケートでは、本展を目的に訪れた来館者の93%が「よかった」と評価するとともに、74%が初めての来館と回答。本展は若い世代をはじめとする新たな層の方々にも銀写真プリントによる写真展の魅力を知っていただく機会になりました。

来館者の声

大きなプリントにもかかわらず、とても細かいところまで鮮明に表現されていて、感動と驚きが止まりませんでした!

子どもの時に楽しんだ絵本が、まさかこんなに緻密な写真だったのかと今日初めて知って驚きました。2歳の子どもの目をキラキラさせて見ていたので、もう少し大きくなったら一緒にこの絵本を楽しみたいと思います。

写真の大きさと立体感にワクワクが高まります。

一枚一枚の写真がとてもきれいで、見れば見るほどかわいくて…引き込まれました。素敵な体験をさせていただきありがとうございました。

素晴らしい『ミッケ!』の世界に感動しました。大きな写真がとてもきれいで、物語の中に入った気分になりました。

子どもがすごく喜んでいて、それを見ている私もうれくなる写真展でした。

すごく楽しかったです!!「また行きたいな」と思いました!

すごく良かったです。大勢の若い人たちが賑わっていて、楽しかったです!

『ミッケ!』の絵本を子どもと読んでことを思い出し、懐かしい気持ちになった。

写真だけでなく実際に小物がたくさん展示されていたので、それを使って、「お題」を出し合っていました。

動画視聴者の声

作家さんご本人のお話を聞くことができうれしい。光をうまく使って工夫して撮影されていたことがよくわかりました。子どもと一緒に必ず見に行きます。



岡本洋子写真展「心模様、花もよう」

2022年4月1日(金)～4月14日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2



岡本洋子氏は、自身が愛してやまないという身近な花や植物、それらが存在する風景をメインに撮影する写真家です。光的確に捉え、天候や大地の様子など、舞台となる背景を見極めて写し取る岡本氏の作品は、美しさと臨場感にあふれています。

本展では、見過ごしてしまいそうな小さな自然にまなざしを向ける岡本氏が、刻一刻と表情を変える花や植物の繊細な美しさを宝探しのような楽しさで捉えた、57点の作品を展示。全て富士フィルムのミラーレスデジタルカメラ「Xシリーズ」で撮影され、花びらの一枚一枚まで階調豊かに描写された華やかな作品群が会場を埋め尽くしました。

岡本氏が自身の気持ちの表現されている作品で構成したという本展に対し、来館者からは、岡本氏の思いや花への愛情、その場の空気感が伝わってきたという声や、身近な花々が初めて見る美しさで捉えられていることに感動する声が寄せられました。

また、岡本氏が花や植物を撮ることになったきっかけや今後の展望を語るインタビュー動画は岡本氏の撮影にかけられる思いや創作の裏側を理解いただく機会となりました。



展示作品点数

57点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
企画／デザイン：株式会社日本写真企画
プリント制作：プロラボ クリエイト

販売物

- ・ 岡本洋子『心模様、花もよう』（日本写真企画）
- ・ 『フォトコン2022年4月号』（日本写真企画）

来館者数

合計9,341人(14日間)

来館者の声

岡本さんの作品を初めて拝見しました。絵のようで、しかも自然な表現に惹かれました。

植物、とりわけ花への愛が伝わってきて感動しました。

在廊している写真家の方に気さくにお話しいただき、とても楽しかった。

Web公開動画

岡本洋子氏と写真雑誌『フォトコン』編集長 藤森邦晃氏による対談動画
前編「写真家 岡本洋子のお話、花写真との出会い」
後編「写真展の見どころ、花写真の魅力について」

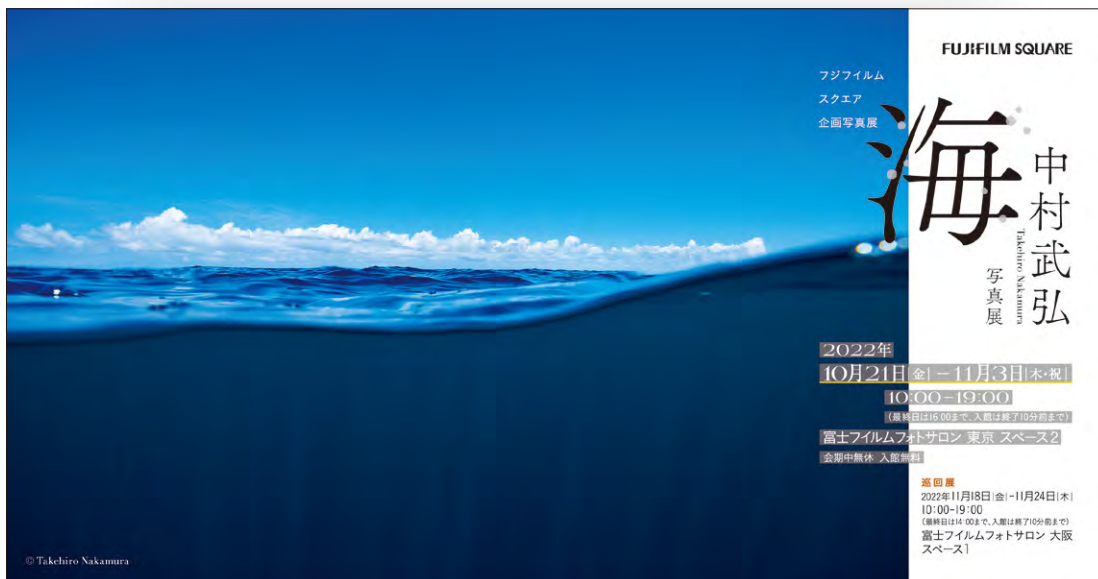


動画視聴者の声

岡本さんの話を聞き、写真をととても身近に感じました。撮り方や背景、光にこだわって改めて花の写真を撮ってみようと思いました。

中村武弘写真展「海」

2022年10月21日(金)–11月3日(木・祝)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2



幼少期より海や自然に触れて育った海洋写真家・中村武弘氏は、海中はもちろん身近な磯や干潟にも惹かれ、海を取り巻く環境全体を15年以上にわたり撮影してきました。その作品には、海中から海上、それらをつなぐ“半水面”、そして上空から臨む海の姿など、海と真剣に向き合ってきた中村氏だからこそ捉えることができた、多彩な世界が広がっています。

本展では、海中に幻想的に浮かぶ魚の群れ、カニやタコ、鳥や哺乳類などが垣間見える不思議な生態、海の砂嵐や海上に架かる虹といった、驚きに満ちた41点の作品を展示しました。そこには「海には実にさまざまな表情があり、身近な海においても多様な生き物の面白さに出会えることを伝えたい」という中村氏の思いが込められています。来館者は、貴重な一瞬を捉えた作品に引き込まれるとともに、在廊している中村氏から直接生き物の生態や撮影秘話について聞きながら、リアルの写真展ならではの醍醐味を味わっていました。

本展は中村氏の作品を通じて、海という世界の奥深さを伝えるとともに、海の多様な“青”が銀写真プリントで余すことなく表現される写真展となりました。



展示作品点数

41点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
企画：デジタルカメラマガジン編集部
デザイン：富澤祐次
プリント制作：プロラボ クリエイト

販売物

中村武弘写真集『海』(自費出版)

来館者数

合計13,268人(14日間)

来館者の声

半分水中・半分水面の写真など、写真に切り取られた海の表情がとても魅力的で、その世界観に見入りました。

作品を見て、海の生態系が豊かで多様であることを改めて実感しました。海洋環境のために自分たちが実践できることを考えるきっかけになりました。

Web公開動画

写真雑誌『デジタルカメラマガジン』編集部 坂本太士氏による
中村武弘氏へのインタビュー動画



動画視聴者の声

写真家がどんな思いを持って撮影しているのかを動画であらかじめ知ることができ、展示をより深く鑑賞することができると、今から楽しみにしています。

とても写真が綺麗で、写真の構図や対象物も興味深いものでした。美しい海を持つ地球をもっと大切に生活しなければいけないと思いました。

「まったり夜キャンプ」～五感ほどける写真鑑賞～

2023年3月17日(金)～4月13日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

展示作品点数

19点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
 後援：港区教育委員会
 企画／デザイン：株式会社ラジアン
 プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者数

合計24,889人(28日間)

来館者の声

初めて写真展に来たのですが、このような音も香りも体感できる展示はなかなかないと思いました。とても楽しかった。

リラックスできた貴重な時間。子どもも非日常の空間を楽しんでいました。

体験型の写真展は初めてで大感動！大自然が好きな私には至福でした。

本展は、視覚に加え、音や香りを用いて鑑賞者の五感に訴えかけることで、写真の世界に没入したような体験を味わっていただくという体感型企画写真展で、フジフィルム スクエアの新たな試みとして開催しました。

今回は「リラクゼーション」をテーマとし、会場に夜の森の中でのキャンプをイメージした空間を再現。暗闇の中、薪の灯りが照らす木々の様子や、森の中の生き物、満天の星など、森の中でのキャンプシーンを捉えた写真を高画質な大判の銀写真プリントで並べました。さらには、樹木のさわやかな香り、森の静けさの中で聞こえる鳥のさえずりやたき火の燃える音などを感じていただく音響、会場全体の照明を落とした中でのランタンや薪台、キャンプチェアなどのキャンプグッズの装飾で、自然の中でゆったり・まったりと過ごす空間を演出しました。

五感に働きかけることで、来館者が想像力を広げ、都会の喧騒から離れて、リラックスできるような鑑賞体験をお楽しみいただく写真展となりました。

館内のアンケートでは、本展を目的とした来館者の95%が「また来たい」と回答しました。星空などの写真の美しさ感動するとともに、実際に森の中で夜のキャンプをしているような気分を味わい、癒やされたという声が多く寄せられました。五感で味わう写真展が新鮮だったというコメントも多く、「体感型」の写真展に対して高い評価をいただきました。

フジフィルム スクエアは、今後もこうした体感型企画写真展をはじめ、普段は写真展に足を運ぶ機会の少ない方々にも気軽に越えただけの企画により、写真の素晴らしさを多くの方に感じていただく機会を提供していきます。



【写真家たちの新しい物語】

松井一記写真展「飛行千景」—飛行機の織りなす幾千もの情景—

2022年4月29日(金・祝)–5月12日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2


飛行千景
—飛行機が織りなす幾千もの情景—

富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト|写真家たちの新しい物語

松井一記 写真展
2022.4.29-5.12

10時-19時 [最終日16時まで・入館は終了10分前まで]
富士フィルムフォトサロン 東京 [入場無料・会期中無休]

主催：富士フィルム株式会社

松井一記氏は、老若男女の心を惹きつける飛行機の姿と、その周囲の風景や人々が生み出す情景を2018年の夏ごろから撮り続けています。カメラを通して飛行機に目を向けると、その力強い存在感と美しい流線美に心が躍り、さらにはさまざまな色彩や表情を見せる空によってその印象が変化するとともに、飛行機を撮影する醍醐味があるといいます。そして、どこかへ旅立つ人、帰る人、見送りに来る人が行き交う空港は、松井氏がさまざまな物語を感じる場所です。

本展は、そんな松井氏の想いが表れた詩情あふれる50点の作品を大サイズの銀写真プリントで展示。展望デッキで人々が繰り広げるドラマ、滑走路で働く人々の姿や、さまざまな色の空・海・山をバックに舞う飛行機の姿、夜の滑走路と飛行機が見せる色とりどりの光の情景など、飛行機が織りなす印象的なシーンの数々が会場を彩りました。

来館者からは、各シーンの迫力や美しさへの驚き、松井氏自身の想いやそこに写った人々への共感の聲が寄せられました。

展示作品点数

50点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者数

合計10,446人(14日間)



Web公開記事

松井一記氏へのインタビュー記事

「飛行機と、その周囲の風景や人々が生み出す情景を写す!」



来館者の声

会場で、貴重な作品の鑑賞とご本人とお話を満喫できて感謝しています。

飛行機と周囲の環境など、さまざまな色のバランスが、綺麗で素晴らしい、感動した。

出展者の声

展示構成の検討、キャプションや挨拶文の作成など幅広い経験のなかで、それぞれの段階において自分の考えを見直せたことが大変意義深いことでした。特に会場でお客さまと接し、キャプションとのセットで作品が成立する場合もあることに気づかされました。飛行機を多様な視点から見つめ、自分なりに解釈し、表現の幅を広げながら活動してきたので、「ロマンを感じる」「全て同じ人の作品とは思えなかった」といった声をいただけたこともうれしかったです。

【写真家たちの新しい物語】

上出俊作写真展「陽だまり レンズ越しに見つめた10mmの海」

2022年6月3日(金)–6月23日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

FUJIFILM SQUARE

富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト
【写真家たちの新しい物語】

上出俊作 写真展

陽だまり
レンズ越しに見つめた10mmの海

2022.6.3[金]–23[木]
富士フィルムフォトサロン 東京
スペース3
入場無料・会期中無休
10:00–19:00
(最終日は16:00まで、入館は終了10分前まで)

主催：富士フィルム株式会社

海の中で出逢った 小さな宝物

沖縄県名護市を拠点に、海の中に暮らすさまざまな生き物たちを撮影する水中写真家、上出俊作氏。被写体とじっくり向き合うことで生み出される作品群は、繊細な色彩をまとう写真や躍動感あふれる写真など、幅広い表現で多くのファンを魅了しています。

本展に登場したのは、体長が1センチにも満たない小さな生き物たち。会場には日本の海で暮らす彼らの日常を丁寧に切り取った29点の銀写真プリント作品が並びました。海といえば一般的には青色がイメージされますが、今回の作品は、上出氏が海中を実際に見た様子を再現するため、水の青色を取り除く方法で撮影されたもの。これにより、魚や海藻などの豊かな色彩であふれた水中の世界を堪能できる写真展となりました。上出氏は生き物たちに負荷をかけないよう、時間をかけて撮影しており、中には3日間かけて撮られた作品もありました。上出氏はこうした秘話を来館者との対話やWebサイト掲載のインタビュー記事で披露し、来館者からは生き物たちの愛らしさに対してだけでなく、撮影にまつわる配慮や熱意についても感嘆する声が多く寄せられました。

展示作品点数

29点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
デザイン：長尾敦子
プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者数

合計19,574人(21日間)

来館者の声

優しい彩りが印象的だった。また、それが実際に撮影された色だと知ることができて良かった。

作家さんと直接お話しできたのでうれしかったです！



Web公開動画

上出俊作氏へのインタビュー動画

「水中で小さな生き物を撮影し始めたきっかけや、撮影するうえで注意していること」



出展者の声

テーマや作品選び、展示、告知まで、写真展開催までの一連の流れを経験し、全てが勉強になりました。そしてテーマ設定の重要性を再認識したことで、撮影への向き合い方も変わり、新たなテーマで作品を発表したいという思いが芽生えました。会場では多くの方に「こんな写真は見たことがない」と言っていただき、うれしさと同時に自らの作品の特異性を認識できました。本展開催により、業界の方から「写真家」と認めてもらえたという感覚もあり、この歴史ある場所で写真展を開催できたことに感謝しています。

【写真家たちの新しい物語】

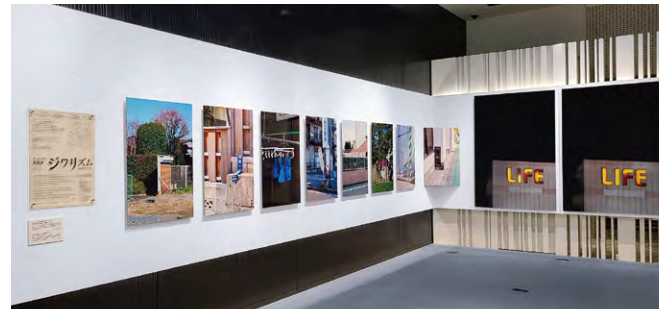
サコッティ写真展「ジワリズム」

2022年11月25日(金)–12月15日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

広告写真の分野で活動するサコッティ氏は、これまでの約10年間、常にカメラを手にさまざまな街を歩き、そこで出会う「後からじわじわと笑いがこみ上げてくる小さな違和感」に気づくと、レンズを向けて丹念に撮影。その写真を「本日の1枚」としてSNSで発信してきました。日常の中で、とすれば「残念」に見えたり、見過ごしたりしそうな存在を丁寧に見つめ、ユーモア豊かに捉えたその独特な世界観は、若年層を中心に共感を呼んでいます。

本展では、ひしめき合う招き猫やピースサインをしたゴム手袋など、サコッティ氏が捉えたユニークな作品18点をセレクト。「どこか切なく、いとおいしい」と感じるこれらの情景を銀写真プリントで細部まで生き生きと表現し、展示しました。自分自身の姿と、「異端とされるもの、ズレていたり、欠けていたりするもの」を重ねてそれらに共感し、背中を押されるような気持ちで撮影してきたというサコッティ氏の作品群は、来館者の心を惹きつけ、温かな笑いや共感を呼び起こしました。何気ない日々で潜んだ面白いものを提示する鋭い感性に、刺激を受けたという方や、新たな視点を得たというコメントも寄せられました。

また、作品づくりについてサコッティ氏が語ったインタビュー動画をWebサイトで公開。作品をできるだけ分かりやすくし、見た人を明るくしたいという思いから、時間をかけて被写体と向き合い、構図や角度を変えて何度も撮影、写真内の細かい部分にまでこだわって仕上げていることなどを伝えました。一瞬で気づきや笑いをもたらすキャッチーな作品づくりに向けたこうした制作努力にも、視聴者や来館者から多くの関心が寄せられました。



展示作品点数

18点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
企画／デザイン：デジタルカメラマガジン編集部
プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者の声

どれも「くすっ」と笑える温かな日常の1コマを写して、心が温まりました。

思わず笑みがこぼれる一枚一枚。そこを切り取るサコッティさんの才能に驚きました。

ジワジワとこみ上げてくる面白さがたまりませんでした。気が付いたらサコッティワールドに引き込まれていました。

最初、「映える」ところに惹きつけられましたが、じっくり見ていると、日常にもかげがえのない一瞬が潜んでいることに気が付き、奥の深い作品だと感じました。

販売物

- ・サコッティ「ジワリズム」(自費出版)
- ・サコッティ「NORA」(自費出版)

来館者数

合計19,504人(21日間)

Web公開動画

サコッティ氏へのインタビュー動画

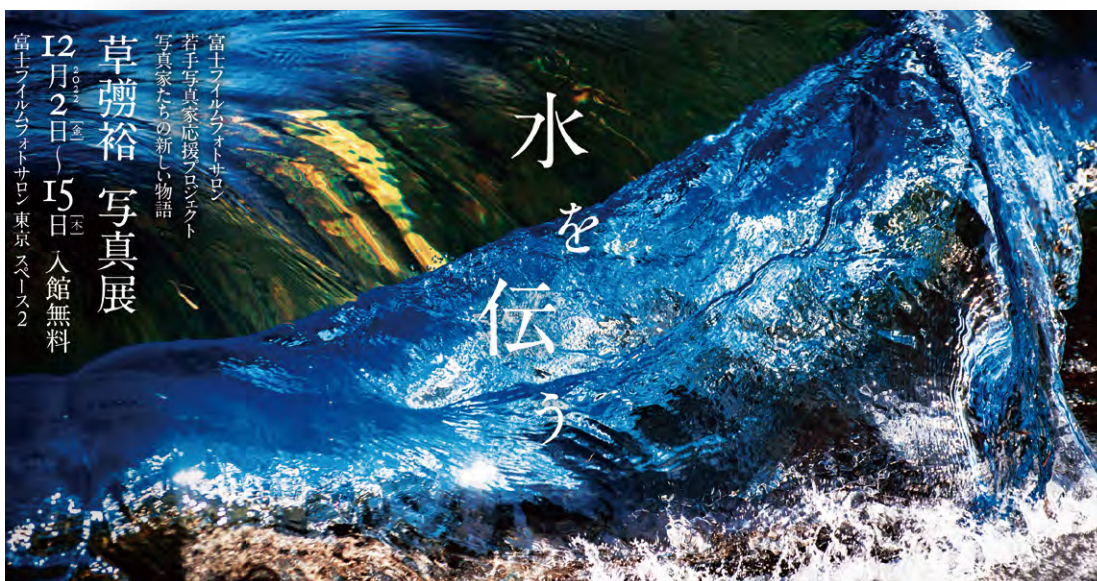


出展者の声

フジフィルム スクエアで写真展を開催することで、胸を張って「写真家」と名乗れるようになりました。小さいころから「写ルンです」やINSTAX「チェキ」を愛用していた私にとって、この憧れの場所で写真展ができ、「撮影を続けてきてよかった」と思いました。作品構成や告知、展示での手厚い支援や、銀写真を知り尽くしたプリントアーティストに作品を鮮やかにプリントしていただいたことも、とても感謝しています。昨日より良い世界をつくれるよう撮り続けていきます。

【写真家たちの新しい物語】

草薙 裕 写真展「水を伝う」

2022年12月2日(金)～12月15日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2

秋田県仙北市を流れる「玉川」。源流付近ではPH1.3という日本一の強酸性水が噴出し、辺りは草木も生えず生物もすめないことから、この酸性水は「玉川毒水」と呼ばれています。写真家の草薙 裕氏は、ごう音や煙とともに毎分約9,000リットルの酸性水が湧出する「玉川毒水」に、人を寄せ付けない原始の自然として畏れを抱くと同時に強く惹かれ、15年以上にわたり撮影。「玉川」を巡る毒水と清水、自然と人の関係を見つめ直そうと、「瞬間と循環」をテーマに、数々の写真展で作品を発表してきました。

本展はその集大成として50点の作品を展示。1/8000秒の高速シャッターで捉えた、玉川の水の力強さも繊細な色と造形を、銀写真プリントの圧倒的な描写力で伝えました。源流付近の「玉川毒水」の作品から始まり、酸性水が引き込まれた田沢湖、中和処理施設を経て清水へと変わっていく下流まで、約100kmの流れを切り取った作品を並べ、黄色やエメラルドグリーン、藍色など、色合いや表情を変えていく流れのグラデーションを表現。激しく渦を巻く濁流、神秘的な輝きを放ちながら宙を舞う水滴など、千変万化する玉川の姿は、来館者を魅了するとともに、その自然環境や歴史への関心を呼び起こしました。

展示作品点数

50点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
企画／デザイン：株式会社クレヴィス
プリント制作：プロラボ クリエイト

販売物

- ・草薙 裕写真集「水を伝う 玉川毒水」(クレヴィス)
- ・オリジナルプリント

来館者数

合計13,512人(14日間)



Web公開記事

草薙 裕氏へのインタビュー記事



来館者の声

タイトルにインパクトがあり、興味を持ちました。写真から自然の力強さを感じました。

自然とは思えないような不思議な色彩に惹きつけられました。

自然が作り出した「毒」の強い力を感じました。

色合いの繊細さ、生き生きとした水の表情が素晴らしいと思いました。

出展者の声

今回、改めて銀写真プリントの深い色の美しさを実感しました。素晴らしいプリントで展示でき、私自身感激するとともに、ご来場いただいた方もプリントの美しさに感動される方が多く、リアルな写真展示ならではの良さを十二分に発揮できたと感じます。また、来場された多くの方に、本展を通じて「玉川毒水」に強い関心を持っていただくことができました。展示作品について初めて新聞社から取材依頼をいただいたほか、本展と連動して刊行された写真集が「木村伊兵衛写真賞」「写真の会賞」に推荐され、今後への大きな励みとなりました。

ポートフォリオレビュー／アワード 2022

2023年3月24日(金)～4月13日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2

開催の経緯

「ポートフォリオレビュー/アワード」は、45歳以下の写真家および写真家を志す方から作品を募集し、プロ写真家による作品講評会（ポートフォリオレビュー、以下レビュー）で作品についてアドバイスをいただき、優秀な作品の写真家に個展開催の機会を提供するという企画です。富士フィルムが運営する若手写真家応援プロジェクトの一環として開催しました。

2022年度のレビュー（講評する講師）を務めたのは、大西みつぐ氏、高砂淳二氏、尾仲浩二氏、広川泰士氏の4名です。

事前審査を通過し一次選考の対象となった44名の中から、2022年8月に計2日間にわたり実施された選考で、ファイナリストレビュー 最終選考会へと進む12名が選出されました。そして、9月の最終選考会でアワード受賞者4名が決まりました。

1. 講評会・選考会

■ ポートフォリオレビュー 一次選考会

2022年8月20日・27日

2022年6～7月に実施した作品募集に対し、全国から定員を大きく上回る応募をいただきました。その中から、レビュー4名による審査を行い、通過した44名に対し、オンラインでレビューを実施。12名をファイナリストとして選出しました。

■ ファイナリストレビュー 最終選考会

2022年9月24日

12名のファイナリストたちが、前回のレビューのアドバイスなどを生かしてブラッシュアップした作品に対して、レビュー4名が個別にアドバイスをを行いました。参加者とレビューとの熱い対話が、各人のその後の作品制作のレベルアップにつながる良い機会となりました。

そして10月、ファイナリストの中から、レビューが1名ずつを推薦し、アワード受賞者4名が決定しました。

2. 写真展開催までの準備

アワード受賞者4名は、富士フィルムフォトサロンでの個展開催に向けて、各推薦写真家と企画者から作品や展示に関するアドバイス、富士フィルムから制作に関する各種サポートを受けました。

具体的には、作品のセレクトや構成、編集、銀写真プリントや色校正、告知物・展示物の制作、告知作業、搬入作業などについて、多岐にわたるアドバイスや支援が行われました。受賞者たちは初体験の連続に試行錯誤しながらも、推薦写真家や多くの関係者とのコミュニケーションを通じて、幅広い分野での学びや発見、インスピレーションを得て、個展を実現させました。

出展者の声(写真展開催までの準備について)

【藏澄侑希氏】

大西先生にご指導いただき、作品群で世界観を表現する面白さを改めて感じました。関係者と銀写真プリントの立体感を追求し、調整を重ねたことも大きな経験です。

【水野景子氏】

レビューを受けて写真展を開催するまでの過程も本当に楽しく、丁寧にご支援いただいた尾仲先生や富士フィルムの方々には感謝の気持ちでいっぱいです。



左から尾仲浩二氏、高砂淳二氏、広川泰士氏、大西みつぐ氏



【杉村友弘氏】

憧れの高砂先生に貴重なアドバイスをいただき、大変励みになりました。また、写真展がこんなにも膨大な作業と多くの方の熱意で作られていることに驚きました。

【李一鳴氏】

初めての写真展でしたが、広川先生にご指導いただき開催を実現できました。先生方との交流や他の写真家の方々の作品から写真について学ぶことも多く、とても良い機会でした。

ポートフォリオレビュー／アワード 2022

2023年3月24日(金)～4月13日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2



展示概要

本展では、出展写真家とその写真家を推薦した写真家との熱い対話によってレベルアップした作品群を、両者の思いが込められたコメントと共に展示しました。写真家自身の心象風景を表した不思議なモノクロ写真、自身がイルカと一体となって撮影した海中写真、心がときめいた瞬間を自由に捉えた旅のスナップ、「人情」を感じさせる正統派のポートレート。それぞれに異なる、みずみずしい感性が光る4名の作品を一堂に集め、写真表現の新たなアプローチを提示しました。

～レビュー 大西みつぐ氏の言葉～

普通、ポートフォリオレビューでは、私たちレビューはその時に限り作者の方々と「そこ」で一期一会のようにして出会っていく。この富士フィルムフォトサロンの企画も、コロナ禍ということもあり、まず40名以上の方々の多様な作品をそれぞれのレビューが事前に拝見し、次にはオンラインでお話をしながらじっくり作品を拝見した。本来ならばここでアワードに選出されてしかるべき。しかしこの企画ならではのこだわりが続いた。

さらに12名に絞り、その後ブラッシュアップした作品も加え、またしてもオンラインでご披露いただく。最終的に4名の方々にアワード受賞者とさせていただいた。ここまででもずいぶん時間をかけているが、さらにさらに、写真展のためのミーティングや展示レイアウト、プリント確認でも、皆さんと直接顔を合わせ話し合う。こんなしつこいほどの「レビュー」は私の経験でもなかったが、ついでが入ってしまった。

なぜなのか。当たり前のことながら私たちもまた写真家だからだ。編集者や評論家が行うレビューとは少し違い、私たち自身が写真を撮る当事者であり、若い作者の皆さんと共有する時間を楽しみ、悩み、迷い、いかに展示しようかという「主体」としてそこにいるからだ。選ぶ側もしっかり試されている。そういう作り手としての責任を、主催者側も交え、作者とともに考え、展示に臨む。錯綜する時代だが、「写真」には常にそんな真摯な^{まごころ}こころが伴うことを、写真展を通じて理解いただきたい。

(ポートフォリオレビュー／アワード2022 写真展開催時の総評より)

展示作品点数

- Vol.1 蔵澄侑希「Labyrinth」 34点
- Vol.2 杉村友弘「友」 23点
- Vol.3 水野景子「Tokimeki moment」 23点
- Vol.4 李一鳴「日没前に」 21点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
企画／運営協力：デジタルカメラマガジン編集部、株式会社コンタクト
デザイン：長尾敦子
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

- ギャラリートーク
- ①受賞者&レビューによる「作品の見どころトーク」
2023年3月24日(金) 17:30～ 水野景子氏、尾仲浩二氏
18:15～ 蔵澄侑希氏、大西みつぐ氏
 - 2023年4月1日(土) 13:30～ 杉村友弘氏、高砂淳二氏
14:15～ 李一鳴氏、広川泰士氏
 - ②企画者が語る「本企画が求める作品・レビューが評価したポイント・展示アドバイス」
2023年4月7日(金) 17:30～ デジタルカメラマガジン編集長 福島晃氏、コンタクト 佐藤正子氏
※各回ともに約30分

販売物

水野景子「Tokimeki moment」
(自費出版)

来館者数

合計18,824人(21日間)

実施レポート

来館者からは、若手写真家にプロ写真家との対話や作品発表の機会を提供し、その可能性を広げるという企画の意義や、新鮮な視点の作品が楽しめる点が評価されました。期間中は本展を目的とした方が多く来館し、その98%が「また来たい」と回答され、本展へのご期待に応える結果となりました。

Vol.1 蔵澄侑希「Labyrinth」



知らない場所に迷い込み、一人取り残されたような時間に不思議な心地よさや安心感を覚えるという、自身の心象風景を30点のモノクロ写真群で表現した蔵澄氏。写真に奥深さがあり、非日常的な物の見方が面白く、見る側もそれらをさまざまなイメージで捉えられる点など、高く評価された点を意識して展示を構成しました。

【蔵澄氏のコメント】…展示した銀写真プリントをお客さまに褒めていただいたことが、写真をモノづくりと捉えている自分には一番うれしかったです。さらに良いモノづくりを目指し、最終的にはプリントを欲しいと思っていただけよう、さらなる努力を重ねていこうと思います。

Vol.3 水野景子「Tokimeki moment」



小さなフィルムカメラを手に、10年の間で欧州やオセアニアなどを旅し、ときめきやワクワク感を覚えた瞬間を写真に収めた水野氏の作品は、作品のまとまりやドラマ性、楽しさが素直に伝わる点が評価され、来館者からも好評を得ました。被写体も撮影地も異なる写真を組み合わせたパネルも展示し、各パネルのテーマが何か、鑑賞者が謎解きするように楽しめる構成づくりに挑戦しました。

【水野氏のコメント】…初めているいろんな方に写真をご覧いただき、直接感想を伺うなど、今回の経験には想像以上の素晴らしい世界が広がっていました。今後も楽しく作品を撮り続け、写真展を開催したいです。

来館者の声 (Vol.1～Vol.4)

作品を見ていると、自分の経験が思い出されるような気がしました。

色鮮やかな作品に、元気でワクワク感をもらいました。

思いが込められている写真が持つ、人を惹きつける力を実感した。

Vol.2 杉村友弘「友」



イルカたちと海中で長い時間を過ごし、丹念なコミュニケーションを重ねてきた杉村氏は、彼らの驚くほど豊かな表情や貴重なシーンを捉えた作品を展示。来館者からも感動の声が寄せられました。大判の銀写真プリントで壁面を埋め尽くし、鑑賞者が海の中でイルカと一緒に泳いでいるような感覚を味わえる展示になるようこだわりました。

【杉村氏のコメント】…イルカの写真は、肌の質感や色の再現など難しい要素が多いのですが、今回、皆さんのさまざまなサポートにより、データの編集、銀写真プリントの現像など、納得のいく仕上がりを実現することができました。

Vol.4 李一鳴「日没前に」



李氏は、中国からの留学に際して暮らした東京の下町で、高齢者の方々にお話を聞き、フィルムカメラでお一人に対して一枚だけ撮影する形で制作したポートレートを展示。被写体から自然とにじみ出た魅力的な表情を捉え、人を引きつける温かさがあると評価された作品群は、一瞬を捉える写真の本質とともに、一期一会の貴重さをも来館者に伝えました。

【李氏のコメント】…今回は来館者の前で作品について語るギャラリートークという大きな挑戦もありました。鑑賞者の疑問に答えることは写真家にとって重要なことで、展示の最も意義のある部分だと思いました。これからも「人生」をテーマに写真を撮り続けていきます。

4名それぞれの独自な世界観が面白いと思った。

若い写真家の個展開催を通じて写真文化が広まっていく、という素晴らしい企画だと思う。

ARTBOOK INNOVATION

—デジタルプレスが拓く写真とアートブックの新機軸—

2022年7月1日(金)–7月21日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

FUJIFILM
Value from Innovation

ARTBOOK INNOVATION アートブック 展示企画

ART BOOK CO-OP online

2022.7.1 fri. — 7.21 thu.

10:00 - 19:00
会期中無休(最終日は16:00まで、入館は終了10分前まで)

フジフィルム スクエア内
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

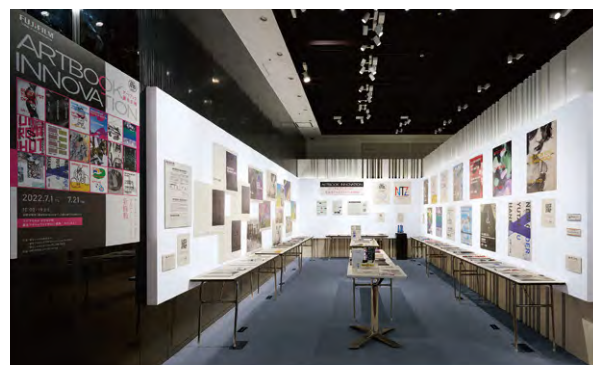
主催：富士フィルム株式会社
富士フィルムビジネスイノベーション株式会社
富士フィルムデジタルプレス株式会社
共催：ARTBOOK CO-OP online

デジタルプレスが拓く
写真とアートブックの
新機軸

写真などを素材にしたクリエイティブなアート作品をまとめた「アートブック」。近年、自身の作品を形に残す手段として関心を持つアーティストが増えており、新たな出版カテゴリーとして注目されています。2020年秋には京都芸術大学教授の後藤繁雄氏を发起人としたバーチャルプラットフォーム「ARTBOOK CO-OP online」(ABC)が発足。写真家、建築家、アートディレクターや美術系大学の学生が作品づくりに取り組み、ECサイトや専門書店、「TOKYO ARTBOOK FAIR」などの活動を通じてアートブックの販売の場を広げています。富士フィルムビジネスイノベーションと富士フィルムデジタルプレスはこの活動に参画し、アーティストへのデジタル技術の提供を通じて、アート領域の価値創造・変革に取り組んでいます。

本展は、ABCの参画アーティストたちが写真と最新デジタル印刷技術を生かして創作した個性あふれる39冊のアートブックを展示しました。プロダクションカラープリンター「Revoria Press PC1120」[Iridesse Production Press]の美しいメタリックカラーやピンクなどの多彩な特殊色、従来のアート出版物に使われてきたオフセット印刷を凌駕する枚葉型インクジェットデジタルプレス「Jet Press 750S」の高い画質を生かした作品により、これまでにない自由な表現をハイクオリティな印刷で追求するアートブックの新機軸を提示しました。

会場では実際にページをめくって作品を鑑賞できるようにしたほか、作品完成までに印刷された校正紙を壁に掲示し、アーティストたちの創作過程とそこに込められたエネルギーを、臨場感をもって伝えました。また、来館された若いアーティストや写真家の方々には、高画質による多様なクリエイティブ表現の追求と、少数数・低予算による自由な作品出版を両立するデジタル印刷の可能性を体感いただき、新たな創作のインスピレーションを得ていただく機会にもなりました。



出展アーティスト(五十音順)

1. 冊子型のアートブック作品(印刷:プロダクションカラープリンター「Revoria Press PC1120」/[Iridesse Production Press]を活用)

アリカワコウヘイ、飯田信雄、伊藤桂司、上田義彦・後藤繁雄、梅沢英樹、大庭大介、岡田佑里奈、川島崇志、鬼頭健吾、児嶋啓多、五木田智央、小林健太、鈴木 親、迫 鉄平、志賀良和、高島依子、多和田有希、ディエゴ、名和晃平、橋村 豊、羽地優太郎、林 修三、松井祐生、水木 壘、横田大輔、若木信吾、TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD 受賞者共作(POST/PHOTOGRAPHY1)、京都芸術大学 写真・映像コース共作(POST/PHOTOGRAPHY2)

2. 大判アートブック作品(印刷:枚葉型インクジェットデジタルプレス「Jet Press 750S」を活用)

上田義彦、岡田佑里奈、小林健太、横田大輔

展示作品点数

ポスター29枚、アートブック39冊

クレジット

主催：富士フィルム株式会社、富士フィルムビジネスイノベーション株式会社、富士フィルムデジタルプレス株式会社
共催：ARTBOOK CO-OP online

来館者数

合計16,252人(21日間)

来館者の声

アーティストやそのファンの心に豊かさを届ける素晴らしい取り組みだと感じました。

デジタル印刷にこのような活用法があるのだと知りました。

アートブックそのものが作品として力を持っていると感じました。

アートブックはさまざまな可能性を持った媒体だと思います。今後の展開が楽しみです。

Jリーグ30周年記念企画 世界の舞台で活躍するJリーガーたちの雄姿

2023年2月3日(金)～2月16日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2



富士フィルムビジネスイノベーションは、サッカーを世界の人々と感動を共感し合えるコミュニケーションの一つと位置付け、Jリーグ発足の20年以上前となる1970年より協賛している「全国高等学校サッカー選手権大会」をはじめ、「天皇杯JFA全日本サッカー選手権大会」など、半世紀以上にわたって、さまざまな大会に協賛してきました。中でも、前年度のJリーグチャンピオンチームと天皇杯優勝チームが対戦する「FUJIFILM SUPER CUP」は、同社が1994年から協賛し今年で30回目を迎えました。同一企業の協賛により世界で最も長く開催されているサッカースーパーカップ大会となっています。

本展は、2023年にJリーグが30周年を迎えたことを記念するとともに、2022年に開催された国際大会で日本代表選手たちの活躍や森保一監督の采配が世界を沸かせたことを受け、「世界の舞台で活躍する選手・監督のJリーガー時代のプレー」を、迫力ある銀写真プリントで振り返りました。Jリーグ所蔵の膨大な写真から、今まさに海外の第一線で戦う選手をはじめ、日本プロサッカーの黎明期より大活躍してきたスター選手のJリーガー時代、各国代表として活躍しJリーグでも活躍した往年の外国人選手、名監督など、Jリーグ30年間の歴史を築いた選手たちの姿を捉えた、貴重な写真62点を展示。現在は海外のビッグクラブで活躍する選手の気迫のプレー、Jリーグや日本代表を率いる名監督の選手時代など、日本サッカーの奥深さと発展が感じられる構成としました。

会場では、過去に放映されたJリーガー出演による富士フィルムのTVCMの公開や「FUJIFILM SUPER CUP」優勝トロフィーの展示のほか、2023年の同大会を戦った選手の等身大パネルと記念撮影ができるスポットを用意。子どもから大人まで幅広い方が訪れ、コアなファンはもとより日頃サッカーに馴染みのない方にも楽しんでいただける写真展となりました。

展示作品点数

62点

クレジット

主催：富士フィルムビジネスイノベーション株式会社
協賛：富士フィルム株式会社
協力：公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
後援：港区教育委員会
デザイン：富士フィルムビジネスエキスパート株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

2月3日(金)～5日(日)の来場者から抽選で、2月11日(土・祝)に開催する「FUJIFILM SUPER CUP 2023」観戦チケットをプレゼント

来館者数

合計11,136人(14日間)

来館者の声

動きの激しいプレー中の生き生きとした瞬間が写真で表現されていて感動しました。

Jリーグ発足当初のスタープレーヤーたちの雄姿を見ることができて良かったです。

子どもから年配の方まで幅広い層が楽しめる展示でした。

GFX Challenge Grant Program 2021 ~Make Your Next Great Image~

2022年11月4日(金)~11月24日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2・3・ミニギャラリー



展示概要

世界で活躍するクリエイターの創作活動の支援を目的とした、富士フィルム主催の助成金プログラム「GFX Challenge Grant Program 2021」。2021年11月~2022年1月、世界を5地域*に分けクリエイティブなアイデアと制作テーマをまとめた撮影企画書を募集しました。想定を超える約3,000件の応募をいただき、非常に多く練られたアイデアの数々に選考は難航しましたが、2022年3月に受賞テーマを決定。米国・メキシコ・アルゼンチン・フィンランド・ドイツ・イタリア・インド・タイ・オーストラリア・中国・香港・日本・韓国・ケニアの写真家による15企画が選出されました。

富士フィルムは、受賞企画の制作活動のサポートとして、「Global Grant Award」受賞者5名に10,000ドル相当、「Regional Grant Award」受賞者10名に5,000ドル相当の助成金を提供。さらに制作用機材として、35mm判カメラの約1.7倍というラージフォーマットセンサーを搭載したことで、超高画質撮影を可能にしたミラーレスデジタルカメラシステム「GFXシリーズ」を無償貸与しました。

本展では、約5カ月の期間を経て完成した静止画13作品を銀写真プリントで展示し、動画2作品をプロジェクターで上映。独創性あふれる写真・映像作品が、写真表現の新たな可能性を提示しました。

* 1.北南米、2.欧州、3.南アジア・オセアニア、4.中国・香港・台湾、5.日本・韓国・中近東・アフリカ

出展クリエイター

- Global Grant Award 受賞者 (5名)
 - ロドリゴ・イジェスカス (Rodrigo Illescas) / アルゼンチン、アンドラス・ドビ (András Dobi) / ドイツ、クリタヌン・タントラポーン (Krittanun Tantraporn) / タイ、リー・ジン (李晋) / 中国、福島あつし (Atsushi Fukushima) / 日本
- Regional Grant Award 受賞者 (10名)
 - ジェシカ・バンデンブッシュ (Jessica Vandenbush) / 米国、アレハンドラ・ラハル (Alejandra Rajal) / メキシコ、ジュリオ・ディ・ストウルコ (Giulio Di Sturco) / イタリア、マリア・ラックス (Maria Lax) / フィンランド、ロブ・アネスレー (Rob Annesley) / オーストラリア、ジョセフ・マシュー・ダニエル (Joseph Mathew Daniel) / インド、パン・ワン (Pan Wang) / 中国、ジャスティン・ヒュイ (Justin Hui) / 香港、シンウー・パーク (Shinwoo Park) / 韓国、バーバラ・ミニシ (Barbara Minishi) / ケニア

展示作品点数

静止画13作品 696点
動画2作品

クレジット

主催: 富士フィルム株式会社
企画: コンタクト
デザイン: 長尾敦子
プリント制作: プロラボ クリエイト

Web公開動画

15作品の写真家によるメイキング動画



来館者数

合計15,878人 (21日間)

実施レポート

富士フィルムは、コロナ禍で世界中のクリエイターが思うように活動できなくなっていた中、創作の機会を少しでも提供したいという思いから本プログラムを立ち上げ、今回の展示を実現させました。

今回、展示した「GFXシリーズ」で撮影された受賞作品は、ラージフォーマットで鮮明に捉えた超巨大洞窟の神秘的な姿、ダンサーの動きを俯瞰での長時間露光で写し取った斬新な視覚表現、人の目では見えない小さな世界を超高解像度で可視化して捉えた美しい昆虫の姿、赤外線領域に対応した「GFX100 IR」で活火山を撮影し、熱エネルギーの姿と共に写し取った風景、気候変動の影響を受ける地域の人々の暮らしを伝えたドキュメンタリーなど、それぞれ新たな表現を意欲的に追求したものでした。

来館者からは、革新的な写真表現を通して、見たことのない多様な世界に出会えることの素晴らしさや、超高解像度で捉えた世界の迫力と色再現性について感嘆する声を多数いただきました。

「Global Grant Award」の受賞者5名の一人に選ばれた福島あつし氏は、「閉塞感が続く情勢の中、日本各地で日常を生きる人の力と輝きを世界に発信したい」と本プログラムに応募。沖縄から北海道まで約3,000kmを歩いて縦断し、出会った人々とコミュニケーションを取りながら撮影を続けました。会場ではその出会いを約500枚の銀写真プリントでロードムービーのように表現。来館者はその作品群を、福島氏の思いが込められたキャプションと合わせて熱心に見入り、多くの感動の声が寄せられました。

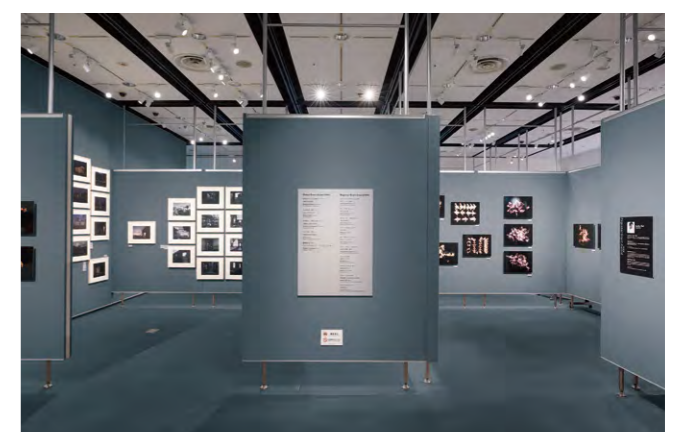
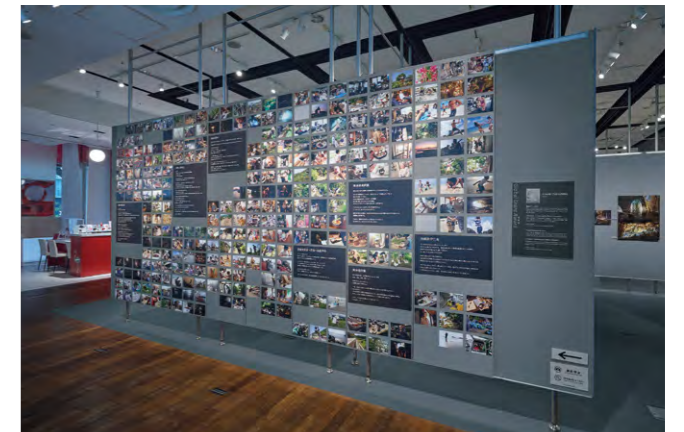
館内のアンケートでは、本展を目的に訪れた来館者の98%が「また来たい」と回答。作品のクオリティーの高さへの評価や継続開催への期待の声をいただきました。富士フィルムは今後も本プログラムを継続し、写真家の方々が世界を舞台に飛躍する場として進化させていきます。

来館者の声

- 写真を通してさまざまな世界を見ることができ、興味深かったです。
- 福島さんの作品から普段何気なく見過ごしてしまう営みの美しさを感じた。日常にも魅力的な場面があると改めて思いました。
- 昆虫の拡大写真が黒色の背景から浮かび上がり、見応えがありました。
- 写真だからこそその表現力を目の当たりにして、写真を撮りたくなりました。
- 写真には実に多彩な表現方法があるものと圧倒された。
- 動画作品も素晴らしい。

動画視聴者の声

- 社会活動の多様性を感じました。こうした活動が広がることにより、世界が争いではなくフレンドリーな方向に向かうための一助になるのではないかと思います。
- 写真は一瞬を切り取るものだが、その裏には長い人生(ストーリー)があることを改めて認識させられました。



16 「見つける! あなたのプリントデイズ」展

2022年4月22日(金)–5月19日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



写真に囲まれた楽しい毎日を提案する富士フィルムのプロモーション「プリントデイズ by FUJICOLOR」。その特別展である本展は、女優の広瀬すずさんが出演されたTVCMで紹介したフォトレシピ本をはじめ、写真をパネルにして飾れる「WALL DECOR(ウォールデコ)」、写真をデザインに生かしたTシャツなどのグッズに加え、さまざまなジャンルで活躍中のインフルエンサーによる写真の楽しみ方も紹介。好きなもの、残したい瞬間を収めた画像を「カタチ」にする楽しさを来館者に伝えました。

展示作品点数

41点

来館者数

合計20,318人(28日間)

クレジット

主催：富士フィルム株式会社

プリント制作：

富士フィルムイメージングシステムズ株式会社

17 10 Years of X Mount

第一期：2022年6月24日(金)–6月30日(木) / 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3
第二期：2022年7月1日(金)–7月7日(木) / 富士フィルムフォトサロン 東京 ミニギャラリー



2012年発表のレンズ交換式ミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM X-Pro1」と3本の「XFレンズ」から始まった「Xマウントシステム」は、2022年に10周年を迎えました。本展では、ファンの皆さまに支えられ多くの後継機種が発売されている「FUJIFILM X-Pro1」と「FUJIFILM X-T1」で撮影された作品を展示。年月を超えて愛される両機種で撮影された写真の魅力をご覧ください。

展示作品点数

第一期：10点、第二期：10点

来館者数

第一期：合計7,148人(7日間)

第二期：合計4,962人(7日間)

クレジット

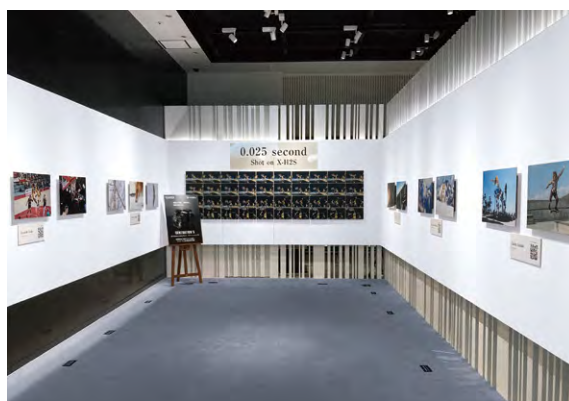
主催：富士フィルム株式会社

プリント制作：プロラボ クリエイト

18 0.025 second

～待望のフラッグシップ機「X-H2S」で撮影する秒間40コマの世界～

2022年7月22日(金)–8月18日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



「Xシリーズ」史上最高(2023年7月時点)の秒間40コマという高速連写、被写体認識を含む高性能オートフォーカスを実現した「FUJIFILM X-H2S」。本展は、高速連写で撮影した躍動感あふれるスポーツの1シーンなど、「FUJIFILM X-H2S」の性能をフルに発揮して撮影された国内外の写真家の作品を展示しました。「Xマウントシステム」10周年のメモリアルイヤーに、表現の自由度をさらに高めたフラッグシップ機が捉えた「秒間40コマの世界」を来館者に堪能いただきました。

展示作品点数

52点

来館者数

合計20,840人(28日間)

クレジット

主催：富士フィルム株式会社

プリント制作：プロラボ クリエイト

19 小平尚典「JAPAN TRAIL」写真展 by GFX50S II

2022年8月19日(金)–9月1日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



沖縄から北海道まで約1万kmを結ぶロングトレイル「JAPAN TRAIL」のポスターの撮影を担当した写真家の小平尚典氏。本展は、小平氏がこの行程でラージフォーマットセンサーを搭載した「FUJIFILM GFX50S II」の高い描写力を生かして日本の美しい山々を捉えた作品を、B1・A1の大判の銀写真プリントで仕上げ、展示しました。山々のコントラスト、植物の生命感など、感動を呼び起こす美しい自然の姿が再現された作品は、日本のトレイルを歩く素晴らしさが味わえると好評でした。

展示作品点数

11点

来館者数

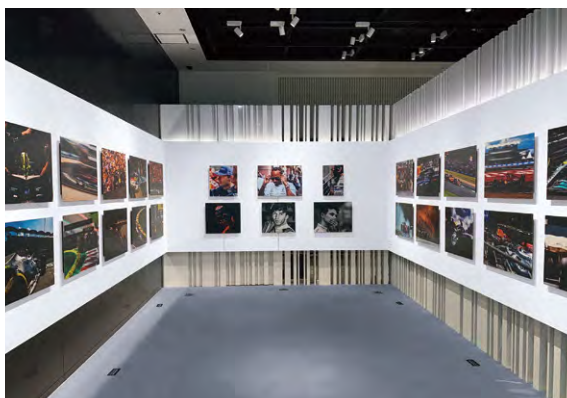
合計10,695人(14日間)

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：日本ロングトレイル協会、
東洋美術印刷株式会社

20 Jay Hirano 「-F1・富士フィルムで撮る ヨーロッパでの戦いの記録-」写真展 by X-H2S

2022年10月7日(金)–10月20日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



ヨーロッパやアジアで撮影するF1フォトグラファーJay Hirano氏。本展では、Hirano氏が2022年のF1ヨーロッパ全戦を「FUJIFILM X-H2S」で撮影した作品を展示しました。ボディを輝かせて駆け抜けるマシンの姿など、スピード感あふれる一瞬を切り取った作品で、F1が持つ美しさや迫力、スケールの大きさ、それらが一体となった素晴らしさを伝える写真展となりました。

展示作品点数

30点

来館者数

合計20,055人(14日間)

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

21 ~Life in Detail~ X-H2作品展

第一期：2022年10月21日(金)–11月3日(木・祝)／富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3
第二期：2022年11月25日(金)–12月8日(木)／富士フィルムフォトサロン 東京 ミニギャラリー



富士フィルムのミラーレスデジタルカメラ「Xシリーズ」の高画質フラッグシップとして2022年9月に発売された「FUJIFILM X-H2」。本展では、本機で国内外のフォトグラファーが撮影した風景やポートレート、マクロ、スナップなど多彩なジャンルの作品を展示し、次世代センサーとプロセッサー、そして高品質の「XFレンズ」を組み合わせることで実現した解像感を紹介しました。肉眼では捉え切れない被写体の微細なディテールを楽しむ写真展となりました。

展示作品点数

第一期：20点、第二期：20点

来館者数

第一期：合計13,268人(14日間)
第二期：合計12,463人(14日間)

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

22 X-T5作品展「人」

第一期:2022年12月16日(金)–12月28日(水) / 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3
 第二期:2023年2月17日(金)–3月9日(木) / 富士フィルムフォトサロン 東京 ミニギャラリー



多様なカメラとレンズをそろえる「Xマウントシステム」の10周年を飾る最後の機種として2022年11月に発売された「FUJIFILM X-T5」は、高画質と小型軽量を追求したカメラです。本展は「FUJIFILM X-T5」により“人”を被写体に撮影した作品を展示。その高い描写力や高速AFによる優れた機動性を生かして、人の表情やその場の空気感までも高精度に写し取ったクオリティーの高い作品群で、「Xマウントシステム」の10年間の進化を示しました。

展示作品点数

第一期:20点、第二期:20点

来館者数

第一期:合計12,117人(13日間)
 第二期:合計17,835人(21日間)

クレジット

主催:富士フィルム株式会社
 プリント制作:プロラボ クリエイト

23 FUJIFILM Xシリーズ作品展「マクロの世界」

2023年1月20日(金)–2月2日(木)
 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



数ある写真撮影方法のなかでも、ファインダーをのぞいた時の驚きはマクロ撮影に勝るものではありません。その驚きを創造性に変えるツールが「Xシリーズ」のマクロレンズたち。本展では、その3本目として2022年に発売した「フジノンレンズ XF30mmF2.8 R LM WR Macro」で捉えた作品を展示しました。宝石のような輝きを放つ昆虫、夜露に光る植物、新鮮な料理などの写真を通し、小さな世界に潜む偉大な存在たちの魅力を来館者に体感いただきました。

展示作品点数

17点

来館者数

合計10,964人(14日間)

クレジット

主催:富士フィルム株式会社
 プリント制作:プロラボ クリエイト

24 清水大輔タイムラプス展「そこにある光」

2023年2月 3日(金)–2月16日(木)
 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



1コマずつ撮った写真をつなげ映像のように見せるタイムラプス。本展は東日本大震災で被災した福島を今を発信するという思いでタイムラプス作品を制作する清水大輔氏が、大型フォーマットセンサーを搭載した「FUJIFILM GFX100」「FUJIFILM GFX100S」で捉えた超高解像度画像を用いた作品を上映。動画では捉え切れない光を写し取る写真の力を生かし、人間には見えにくいものや日常で忘れていたものを可視化し、あるがままの「そこにある光」を表現しました。

展示作品点数

5台のテレビを使用し、タイムラプス映像作品を上映

来館者数

合計11,136人(14日間)

クレジット

主催:富士フィルム株式会社
 協力:TVS REGZA株式会社、
 株式会社ナカムラ、
 エイゾーラボ株式会社、
 世界遺産 仁和寺

25 「写真とポスカ展」

～ハーフサイズプリントとポスカで、毎日にもっと彩りを～

2023年2月17日(金)～3月16日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



本展では、写真をかわいい手のひらサイズでカタチにできる「ハーフサイズプリント」の楽しみ方として、三菱鉛筆株式会社のサインペン「ポスカ」による手軽な描き込みで楽しく写真をアレンジする方法を提案しました。人気のプロトラベラーやインスタグラマーがアレンジしたハーフサイズプリントを展示したほか、来館者が参加できる無料イベントも開催。参加者が会場でセルフ撮影したデータをハーフサイズプリントに出力してお渡しし、描き込みを楽しんでいただきました。お気に入りの写真をカタチにして自分らしく楽しんだり贈ったりする魅力を、多くの方に実感していただく写真展となりました。



クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：三菱鉛筆株式会社、GENIC編集部
プリント制作：富士フィルムイメージングシステムズ株式会社

併催イベント

体験イベント：2023年3月4日(土)／5日(日)／11日(土)／12日(日) 10:30～18:00
会場：フジフィルム スクエア 2F 特設会場

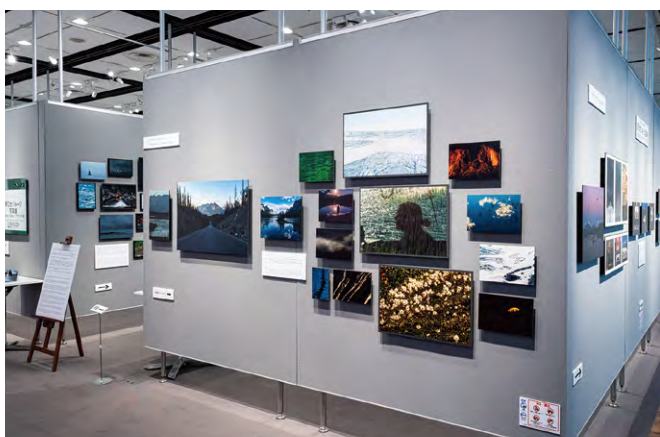
来館者数

合計23,766人(28日間)

26 野辺地ジョージ写真展

「Roads to Denali- デナリへの道」

2023年3月10日(金)～3月23日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2



カナダ人の父を持つ写真家・野辺地ジョージ氏は、2022年8月にバンクーバーを出発し、カナダ西部の広大な大地を北上し、北米大陸最高峰のデナリ(マッキンリー山)がそびえ立つ自然の聖地・デナリ国立公園までの約10,000kmを21日間の強行日程で往復しました。本展では、そのロードトリップで、野辺地氏が出会った風景を富士フィルムのミラーレスデジタルカメラで撮影した写真を時系列で展示。偉大なデナリの山容、夜空を染めるオーロラ、荒野に暮らすオオカミなど、自然の雄大さや厳しさを伝えるスケールの大きな作品が、多くの来館者に驚きや感動をもたらしました。



展示作品点数

85点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者数

合計11,996人(14日間)

写真家エリオット・アーウィット作品展 「観察の美学 筋書きのない写真たち」

2022年3月31日(木)～6月29日(水)
写真歴史博物館

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展



ニューヨーク、1974年

Elliott Erwitt

ELLIOTT ERWITT

写真家 エリオット・アーウィット 作品展

観察の美学 筋書きのない写真たち

2022年3月31日(木)～6月29日(水)
10時～19時(最終日19時) 会期中無休・入館無料

主催：富士フイルム株式会社 後援：港区教育委員会

FUJIFILM SQUARE

展示作品点数

25点

クレジット

主催：富士フイルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画：フォトクラシック
デザイン：脇野直人

主要メディア掲載

新聞：毎日新聞(5月13日)／写真・カメラ紙(誌)：コマーシャル・フォト(6月15日)、
隔月刊風景写真(6月20日)、フォトコン(6月20日)／Webサイト：antenna、TRILL、
毎日新聞WEB

来館者数

合計70,476人(91日間)

エリオット・アーウィット氏は、ニューヨークを拠点に1949年から約70年にわたり活躍する写真家です。世界的な写真家集団「マグナム・フォト」*の創設メンバーであるロバート・キャパの推薦を受け、1953年に25歳の若さでマグナム・フォトに参加。1966～1968年の3期にわたり会長を務めるなど、マグナム・フォトの初期メンバーとして活動を支えると同時に、ジャーナリスティックなエッセイから広告写真、映画、テレビ番組など、幅広いジャンルで多才ぶりを発揮してきました。

本展は、アーウィット氏の数多くの名作から、1980～90年代に制作されたモノクロのゼラチン・シルバー・プリントによる貴重なオリジナル作品25点を展示しました。20世紀を代表する著名人のみならず、何気ない日常の瞬間を捉え、ウィットとユーモアに富み、人間味あふれるアーウィット氏の写真は、いつの時代も人々から愛されています。恋人たちの一瞬、子どもたちの愉快的な表情、人間と犬とのユーモラスな関係……目の前で起こる偶発的なドラマを、冷静に、そして愛情深く見つめる「観察の美学」ともいべき視点によって、その写真には人生の喜怒哀楽が濃密に描かれています。

会場では、10代の学生からビジネスパーソン、80代の方々まで、幅広い層の来館者がアーウィット氏のユニークな視点や構図の素晴らしさに感動。会場でのアンケートには多数の感想コメントが寄せられ、本展を目的に来館された97%の方が、「本展にまた来たい」と回答しました。現在もマグナム・フォト最高齢の写真家として重要な地位を占めるアーウィット氏の写真の普遍的な魅力を、現代の多くの方々にも実感いただける機会となりました。

*1947年、発案者である報道写真家のロバート・キャパと、アンリ・カルティエ・ブレッソン、ジョージ・ロジャール、デビッド・シーモアらにより、写真家の権利と自由を守り、主張することを目的として創設された、世界を代表する国際的な写真家集団。



来館者の声

アーウィットの作品を30年前に見たときの感動を思い出しながらの鑑賞でした。また、コンシェルジュの方の解説のおかげで、思いのほか大変有意義な時間となりました。

モノクロ写真が新鮮で良かったです。

限られたスペースに、非日常が詰まっていて面白かった。

植田正治写真展「ベスト写真帖 白い風」

2022年6月30日(木)～9月28日(水)
写真歴史博物館

生涯、故郷の山陰地方にとどまり、アマチュア精神に貫かれた遊び心と旺盛な実験精神で、写真の新しい地平を築いた植田正治(1913-2000)。独特の感性で創り出された作品は世界的に高く評価され、今なお若い世代を含めた多くの人々に愛されています。植田が写真にのめり込んだ大正時代は、日本の芸術写真が隆盛を極めた時代。当時、アマチュア写真家たちの間で流行したのが、「ベストポケット単玉レンズ(単焦点レンズ)付きカメラ」、通称「ベスト単」を使い、そのレンズフィルターのフードを外して撮影するという手法です。独特のソフトフォーカス効果が得られるこの撮影手法は、数多くの芸術写真の傑作を生み出し、青年期の植田もモノクロ撮影に取り入れたのです。

「白い風」は、その半世紀後、植田が「ベスト単」の撮影手法を改めてカラー写真で蘇らせ、日本の風景を捉えたシリーズで、その撮影には、当時最新のネガカラーフィルム「フジカラーF-II」が使われました。本展は、1981年に日本カメラ社から刊行された写真集『白い風』の入稿原稿として使用された当時のプリントから41点を精選して展示。今回の展示プリントは、長い年月を経て、写真展としては初めての公開が実現したもので、モノクロ作品が目に見えることの多い植田のカラー作品をご覧いただける貴重な機会となり、カラー作品で味わえる「植田調」の表現を、多くの来館者が深く感じ入った様子で鑑賞していました。また、フジフィルム スクエア コンシェルジュによる各作品の撮影方法や仕上がりに関する解説も好評を博しました。



展示作品点数

41点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：植田正治事務所
後援：港区教育委員会
企画：コンタクト
デザイン：遠藤一成

主要メディア掲載

新聞：毎日新聞夕刊(東京、名古屋、北九州、6月27日)／写真・カメラ紙(誌)：フォトコン(6月20日)、コマーシャル・フォト(7月15日、8月12日、9月15日)、CAPA(8月20日)／その他雑誌：月刊ギャラリー(8月1日)／Webサイト：iza、読売新聞オンライン、@DIME、毎日新聞WEB、グノシー、Yahoo!ニュース

来館者数

合計78,376人(91日間)

来館者の声

ある歌手が鳥取の植田正治さんの美術館を紹介したことをきっかけに植田さんを知りました。そして、この写真展に伺いました。貴重な機会をありがとうございました。

大好きな写真集に掲載されている写真の貴重なオリジナルプリントを見ることができてうれしいです。

植田正治さんの作品にカラー作品があることを初めて知りました。素晴らしい展示をありがとうございました。

人間写真機・須田一政 作品展

「日本の風景・余白の街で」

2022年9月29日(木)–12月28日(水)
写真歴史博物館



〔左〕風景・銀井河 1982年／〔右〕静岡・三島 1984年 ©SUDA ISSEI Works

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展

人間写真機

須田一政

作品展「日本の風景・余白の街で」

2022年

9月29日(木)–12月28日(水)

10時–19時 最終日は16時まで、
入館は終了30分前まで 会期中無休・入館無料

主催：富士フィルム株式会社 監修：SUDA ISSEI Works 企画：フォトクラシック 後援：港区教育委員会

FUJIFILM SQUARE

展示作品点数

32点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
監修：SUDA ISSEI Works
企画：フォトクラシック
デザイン：脇野直人
プリント制作：写真弘社

主要メディア掲載

新聞：朝日新聞夕刊(10月25日)／写真・カメラ紙(誌)：隔月刊風景写真(8月20日)、CAPA(8月20日)、コマーシャル・フォト(9月15日)／Webサイト：アートアジェンダ、this is gallery、Photo & Culture、Tokyo、Tokyo Art Beat

来館者数

合計91,047人(91日間)

須田一政(1940–2019)は、「日常に潜む異質な世界」を捉えたスナップ作品で国際的に高く評価されている、戦後日本を代表する写真家です。初期の代表作「風姿花伝」をはじめ、カメラを通して事物を即物的、神秘的に探求する写真表現は見る者に強烈なインパクトを与え、2019年に世を去った後も、国内外を問わず写真展の開催や写真集の出版が相次ぎ、現在も再評価の機運が広がっています。

本展では、フジフィルム スクエアの前身にあたる富士フォトサロン(東京・銀座)で1986年に開催された須田の写真展「日本の風景・余白の街で」から32点を厳選し、新たに制作したカラープリントで展示しました。同シリーズは、6×6cm判カメラでカラーポジフィルムを用い、1982年から1986年にかけて地元である東京・神田周辺から上野、浅草、さらに軽井沢、箱根など、日本各地で奇妙な光景を捉えた、須田の知られざる傑作です。同シリーズで、須田がレンズを通してそれぞれの場所で見えていたものは、当たり前前の美しい風景ではなく、いわばその「余白」へと押し出された、何気ない光景や瞬間でした。しかし、須田の眼によって切り取られた画面は、見慣れたものの裏側や、その奥に潜む本性を暴くような緊張感に満ち、同時に、個人的な視覚体験を表現する写真の本質を明らかにしています。

会場では須田の長年のファンはもちろん、若い世代も引き込まれるように鑑賞。「須田調」と呼ばれる独特の世界観に感銘を受けたという声が多く聞かれました。本展を目的に訪れた来館者の98%が「また来たい」と回答するなど、多くの方にご満足いただく写真展となりました。



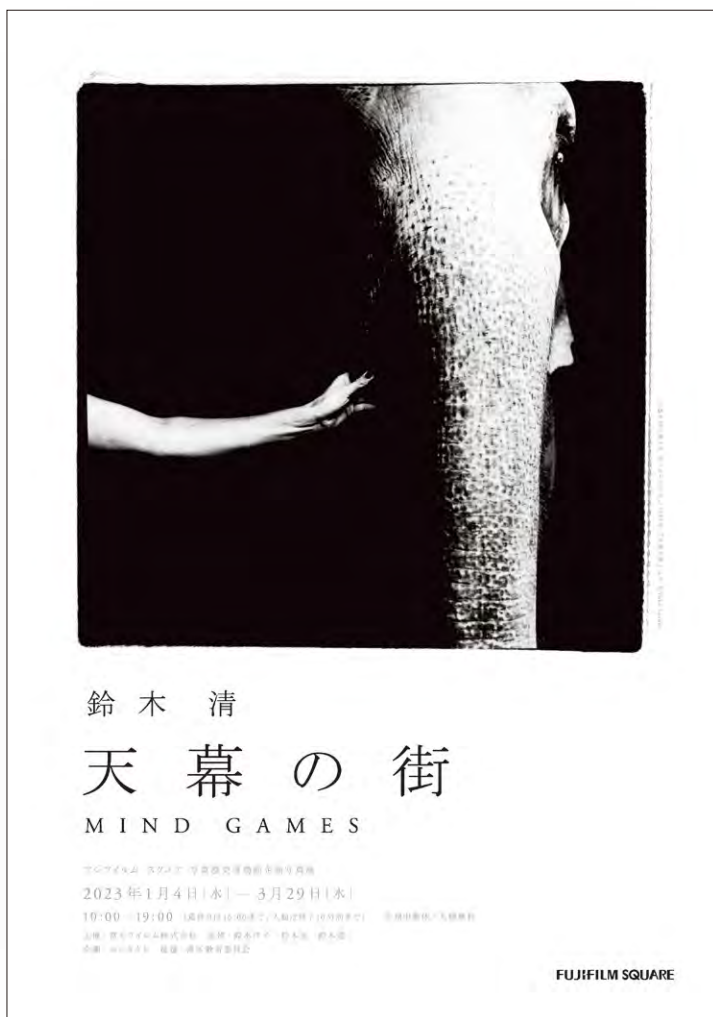
来館者の声

須田作品の、大きな作品を見るチャンスがなかったので、今回の展示はありがたい。

須田さんの写真が好きなので、何時間でも見ていられる。

I didn't know about Issei Suda, but I was very impressed.

鈴木 清 写真展「天幕の街 MIND GAMES」

2023年1月4日(水)～3月29日(水)
写真歴史博物館

展示作品点数

39点

クレジット

主催：富士フイルム株式会社
 後援：港区教育委員会
 監修：鈴木洋子、鈴木 光、鈴木 遊
 企画：コンタクト
 デザイン：遠藤一成

主要メディア掲載

新聞：朝日新聞夕刊(1月31日)、読売新聞(3月17日) / 写真・カメラ紙(誌)：CAPA(12月20日)、フォトコン(12月20日) / その他雑誌：月刊ギャラリー(2月1日) / Webサイト：artscape、CAPA CAMERA WEB

来館者数

合計72,604人(85日間)

約30年間の活動で8冊の写真集(1冊以外は全て自費出版)を発表した鈴木 清(1943-2000)は、表現媒体としての写真集を唯一無二の次元に昇華させ、近年、海外を含めて再評価の機運が高まっている写真家の一人です。自ら綿密に編んだ多くのダミー本*による試行錯誤の末、世に提示した写真集は、そのどれもが五感の喜びを呼び覚ますような強い存在感を放っています。

福島県の炭鉱町に生まれた鈴木 清は、自身の原風景でもあり、斜陽となりつつある各地の炭鉱を撮影した作品シリーズを1969年から翌年にかけて発表し、写真家としてデビュー。1972年、装丁やレイアウトまで自ら手がけた初の写真集『流れの歌 soul and soul』を自費出版します。1982年には3冊目の自費出版となった『天幕の街 MIND GAMES』を刊行。1983年に本写真集と同名展覧会で第33回日本写真協会賞新人賞を受賞しました。

本展では、『天幕の街』所収作品39点と、写真集刊行のために鈴木本人が制作した貴重なダミー本を展示しました。ご遺族のご協力により、未発表作品や過去展覧会での掲示物の展示も実現。展覧会や出版に打ち込んでいた当時の鈴木の内面に迫りました。幼い頃に父親と見たサーカスの人々や路上生活者など、「漂泊者たち」のイメージを写し取った作品群は、鈴木の記憶と夢をたどる旅のようであり、見る者を夢と現実の狭間に誘いました。

本展を目的に来館した96%の方が「また来たい」と回答したほか、鈴木 の 作品を初めて鑑賞した方々も、その独自の表現世界に感銘を受けていました。

*写真集に使う作品のコピーやキャプションなどを配置した刊行前の試作本。



来館者の声

鈴木清さんご自身の手による貴重なオリジナルプリントの展示を見ることができて感謝です。ありがとうございました。

写真作品だけでなく、ダミー本の展示などもあり、想像以上の素晴らしい展示だった。

今回の展示で初めてこの作家を知りました。独創的で面白かったです。

写真展開催リスト

■富士フィルムフォトサロン 東京・ミニギャラリー／開催写真展 計82本(当社が主催・共催・協賛する企画展34本、公募展48本)

第73回 中日写真展	2022年4月1日(金)～4月7日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 岡本洋子写真展「心模様、花もよう」	2022年4月1日(金)～4月14日(木)
PREMIUM PRINTで飾る「第3回 フォトアドバイス写真展」	2022年4月1日(金)～4月21日(木)
第19回 港区観光フォトコンテスト2021	2022年4月1日(金)～4月28日(木)
曾布川善一写真展「富士山 ～天地異形～」	2022年4月8日(金)～4月14日(木)
第60回 富士フィルムフォトコンテスト入賞作品発表展	2022年4月15日(金)～4月28日(木)
富士フィルム 企画写真展 「見つかる! あなたのプリントデイズ」展	2022年4月22日(金)～5月19日(木)
フォトグループいびぎ「2022四季のいびぎ写真展」	2022年4月29日(金・祝)～5月5日(木・祝)
富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】松井一記写真展「飛行千景」—飛行機の織りなす幾千もの情景—	2022年4月29日(金・祝)～5月12日(木)
須藤幸司写真展「身近な水辺に棲む青い宝石 ～東京郊外のカワセミ～」	2022年4月29日(金・祝)～5月19日(木)
古屋行男写真展「中国 雲南面影」	2022年5月6日(金)～5月12日(木)
第30回 林忠彦受賞記念写真展 初沢亜利「東京 二〇二〇、二〇二一。」	2022年5月13日(金)～5月19日(木)
唐木 徹 写真展「Rail on Kyushu」～九州の四季の彩りを巡る旅へ～	2022年5月13日(金)～5月19日(木)
今井清博写真展「天地はブルーモーメント」	2022年5月20日(金)～5月26日(木)
片山 徹 写真展「神気(シンキ)」	2022年5月20日(金)～5月26日(木)
ロイヤルリゾート那須「四季の那須フォトコンテスト」写真展	2022年5月20日(金)～6月9日(木)
東京写真月間2022 日本写真協会賞受賞作品展	2022年5月27日(金)～6月2日(木)
大貫 亘 写真展「蛸 ～里山に舞う～」	2022年5月27日(金)～6月2日(木)
創立20周年記念 日本風景写真協会 選抜展「四季のいろ」	2022年6月3日(金)～6月9日(木)
富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】上出俊作写真展「陽だまり レンズ越しに見つめた10mmの海」	2022年6月3日(金)～6月23日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 「写真家・平間至の両A面」～アー写(アーティストの写真)/エー写(営業写真館の写真)～	2022年6月10日(金)～6月30日(木)
富士フィルム 企画写真展 10 Years of X Mount 第一期	2022年6月24日(金)～6月30日(木)
一般社団法人 日本自然科学写真協会 第43回 SSP展「自然を楽しむ科学の眼 2022-2023」	2022年7月1日(金)～7月7日(木)
富士フィルム 企画写真展 10 Years of X Mount 第二期	2022年7月1日(金)～7月7日(木)
富士フィルムビジネスイノベーション 企画写真展 ARTBOOK INNOVATION –デジタルプレスが拓く写真とアートブックの新機軸–	2022年7月1日(金)～7月21日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 鈴木一雄写真展「聲(こえ)をきく」～Listening to the Spirits in the Wild～	2022年7月8日(金)～7月28日(木)
富士フィルム 企画写真展 0.025 second ～待望のフラッグシップ機“X-H2S”で撮影する秒間40コマの世界～	2022年7月22日(金)～8月18日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 「生き物たちの地球」写真・文 前川貴行	2022年7月29日(金)～8月18日(木)
「2022全日本読売写真クラブ展」	2022年8月19日(金)～8月25日(木)
富士フィルム 企画写真展 小平尚典「JAPAN TRAIL」写真展 by GFX50S II	2022年8月19日(金)～9月1日(木)
とやま森の四季彩フォト大賞 歴代入賞作品展	2022年8月19日(金)～9月1日(木)
四季会写真展「第35回 四季彩美」	2022年8月26日(金)～9月1日(木)
小西由美写真展「優艶の山郷」～奥高野の山裾に住いて～	2022年8月26日(金)～9月1日(木)
“PHOTO IS”想いをつなぐ。あなたが主役の写真展 2022	2022年9月2日(金)～9月7日(水)
内藤忠行&佐藤仁重 コラボレーション写真展「二人の写真家が見たNEW YORK×NEW YORK」	2022年9月9日(金)～9月15日(木)
第15回 山中湖フォトグランプリ写真展	2022年9月9日(金)～9月29日(木)
X-FEISS 2022	2022年9月9日(金)～9月11日(日)
「富士フィルムフォトコンテスト」歴代グランプリ作品展	2022年9月12日(月)～10月6日(木)
全日写連フォトフェスティバル2022 第54回 カラーフェア／第21回 全日本モノクロ写真展／第14回 人間大好き!フォトコンテスト	2022年9月16日(金)～9月22日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 かくれんぼ絵本「ミッケ!」シリーズ刊行30周年記念「ミッケ!」にはいろいろ ～ウォルター・ウィック「チャレンジ ミッケ!」の世界～	2022年9月23日(金・祝)～10月13日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 FUJIFILM Xシリーズ作品展 ～宮沢あきら・岡本洋子～	2022年9月30日(金)～10月13日(木)
富士フィルム 企画写真展 Jay Hirano 「-F1-富士フィルムで撮るヨーロッパでの戦いの記録-」写真展 by X-H2S	2022年10月7日(金)～10月20日(木)
2022富士フィルム営業写真コンテスト 入賞作品発表展	2022年10月14日(金)～10月20日(木)
山田耕熙写真展「The Land of Tigers」	2022年10月14日(金)～10月20日(木)
河本憲治写真展「魅惑の南インド ～出会いとふれあいと～」	2022年10月14日(金)～11月3日(木・祝)

※緑字は当社が主催・共催・協賛する企画展

第41回 ハッセルブラッドフォトクラブ写真展	2022年10月21日(金)～10月27日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 中村武弘写真展「海」	2022年10月21日(金)～11月3日(木・祝)
富士フィルム 企画写真展 ～Life in Detail～ X-H2作品展	2022年10月21日(金)～11月3日(木・祝)
フォトクラブ写楽 20周年記念写真展「四季の彩り」	2022年10月28日(金)～11月3日(木・祝)
富士フィルム 企画写真展 GFX Challenge Grant Program 2021 ～Make Your Next Great Image～	2022年11月4日(金)～11月24日(木)
服部ひろみ写真展「厳冬の宗谷本線 ～最北の鉄路を護る～」	2022年11月25日(金)～12月1日(木)
競馬写真家写真展「翼 サラブレッド2022」	2022年11月25日(金)～12月1日(木)
富士フィルム 企画写真展 ～Life in Detail～ X-H2作品展	2022年11月25日(金)～12月8日(木)
富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 サコッティ写真展「ジワリズム」	2022年11月25日(金)～12月15日(木)
高橋 清 写真展「Swan Scape」	2022年12月2日(金)～12月8日(木)
富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 草薙 裕 写真展「水を伝う」	2022年12月2日(金)～12月15日(木)
相原正明写真展 On The Earth ～超大陸 オーストラリア～	2022年12月9日(金)～12月15日(木)
丸の内写真教室 作品展 & FUJIFILM Xシリーズ作品展	2022年12月9日(金)～12月28日(水)
「建コンフォト大賞」写真展 ～暮らしの中の土木～	2022年12月16日(金)～12月28日(水)
「2022年 日本雑誌写真記者会写真展」	2022年12月16日(金)～12月28日(水)
富士フィルム 企画写真展 X-T5作品展「人」	2022年12月16日(金)～12月28日(水)
第18回美しい風景写真100人展	2023年1月4日(水)～1月19日(木)
風景写真Xtension展	2023年1月4日(水)～1月19日(木)
2022年 第17回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展	2023年1月20日(金)～1月26日(木)
フォト翔 写真展「刻の香り」	2023年1月20日(金)～1月26日(木)
「麻布未来写真館」パネル展 ～次世代へつなぐ麻布の記憶～	2023年1月20日(金)～2月16日(木)
富士フィルム 企画写真展 FUJIFILM Xシリーズ作品展「マクロの世界」	2023年1月20日(金)～2月2日(木)
山岳写真展「悠久の峰2023」	2023年1月27日(金)～2月2日(木)
有馬雅美写真展「尾瀬夢幻 ～水の織りなす美しき世界～」	2023年1月27日(金)～2月2日(木)
山本 一 写真展「うるわしき五島列島 一残しておきたい風景」	2023年2月3日(金)～2月9日(木)
富士フィルムビジネスイノベーション 企画写真展 リーグ30周年記念企画 世界の舞台で活躍するリーガーたちの雄姿	2023年2月3日(金)～2月16日(木)
富士フィルム 企画写真展 清水大輔タイムラプス展「そこにある光」	2023年2月3日(金)～2月16日(木)
高麗橋 心粹写真展「飛石の心」	2023年2月10日(金)～2月16日(木)
第33回 NHK学園 生涯学習写真展	2023年2月17日(金)～2月23日(木・祝)
富士フィルム 企画写真展 X-T5作品展「人」	2023年2月17日(金)～3月9日(木)
富士フィルム 企画写真展 「写真とボスカ展」～ハーフサイズプリントとボスカで、毎日にもっと彩りを～	2023年2月17日(金)～3月16日(木)
「丸の内写真倶楽部展」	2023年2月24日(金)～3月2日(木)
第44回 よみうり写真大賞 入賞作品発表展	2023年3月3日(金)～3月9日(木)
渥美顯二写真展「SAHARA ILLUSION」幻想サハラ	2023年3月3日(金)～3月9日(木)
菘口ヒロミ写真展「桜の旋律II」	2023年3月10日(金)～3月16日(木)
富士フィルム 企画写真展 野辺地ジョージ写真展「Roads to Denali- デナリへの道」	2023年3月10日(金)～3月23日(木)
第15回 六本木フォトコンテスト写真展	2023年3月10日(金)～4月6日(木)
第74回 中日写真展	2023年3月17日(金)～3月23日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 「まったり夜キャンプ」～五感ほどける写真鑑賞～	2023年3月17日(金)～4月13日(木)
富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト【ポートフォリオレビュー/アワード 2022】	2023年3月24日(金)～4月13日(木)

■写真歴史博物館／開催写真展 計4本

FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 写真家エリオット・アーウィット作品展「観察の美学 筋書きのない写真たち」	2022年3月31日(木)～6月29日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 植田正治写真展「ベス単写真帖 白い風」	2022年6月30日(木)～9月28日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 人間写真機・須田一政 作品展「日本の風景・余白の街で」	2022年9月29日(木)～12月28日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 鈴木 清 写真展「天幕の街 MIND GAMES」	2023年1月4日(水)～3月29日(水)

フジフィルム スクエアは2022年度、自らが主催・共催・協賛する企画展38本、プロの写真家やアマチュアの写真愛好家の方から作品を募集する公募展48本、合計86本の写真展を入館無料で開催し、約31万人の方にご来館いただきました。Webサイトでは写真展出展者へのインタビュー動画を27本、当社コンシェルジュによる写真の歴史の解説動画を7本公開。総再生回数は68,403回を数えました*。また、施設について気軽に読んでいただくコラムも35本掲載。従業員向けポータルサイトでも17回写真展の内容を紹介しました。

*2023年6月30日現在。広告配信による再生は含まない。

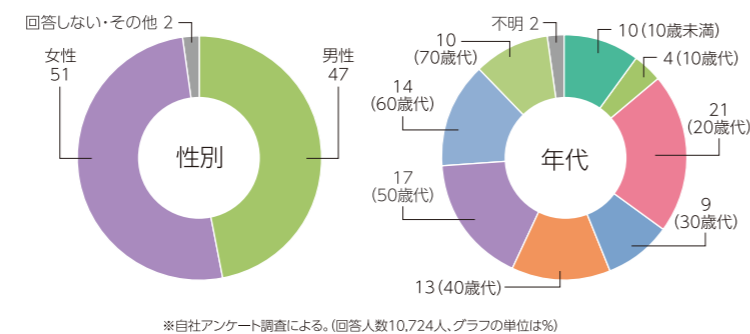
来館実績

来館者数

年末年始を除く
稼働日数359日の来館者

313,566人
1日平均
873人

来館者属性



Web公開動画

フジフィルム スクエア Webサイトで公開した動画本数。

34本
総再生回数
68,403回

*2023年6月30日現在。広告による再生は含まない。

〈動画公開例〉

フジフィルム スクエア コンシェルジュによる写真の歴史解説動画

富士フィルムで写真関連製品・サービスの研究・開発・技術サポートに長年携わったOBが、コンシェルジュとして、写真の歴史をわかりやすく解説する動画を2022年度新たに公開。公開動画7本の合計再生回数は5,566回*を数えました。

*2023年6月30日現在。



〈2022年度公開〉

1. カメラ・オブスクーラ ～カメラのもとになった原理～
2. 光を描きとどめる感光材料の誕生 ～ダゲレオタイプとカロタイプ～
3. 湿板写真の発明 ～乾く前に撮影する!～
4. 乾板写真からフィルムへの発展 ～いつでもどこでも撮影できるように～
5. さまざまなフォーマットのフィルム × カメラの登場
6. フィルムのカラー化と一般への普及(その1) ～高感度化・粒状性向上・現像サービスの充実～
フィルムのカラー化と一般への普及(その2) ～カメラとフィルムのシステム化による写真人口の拡大～

写真展の開催回数

86本

▶当社が主催・共催・協賛する企画展 38本

若手写真家から作品を募集し、作品発表の機会を提供する企画展「写真家たちの新しい物語」4本、歴史的に価値の高い作品を展示する写真歴史博物館の企画写真展4本、当社が主催・共催・協賛する写真展30本を開催。

▶公募展 48本

Web公開インタビュー記事

フジフィルム スクエア Webサイトで公開したインタビュー記事本数。

2本

Webマガジン公開コラム

フジフィルム スクエアや写真について気軽に読んでいただくコラム

35本

主要交通広告

日比谷線・六本木駅、日比谷線・恵比寿駅、千代田線・乃木坂駅、都営大江戸線・青山一丁目駅、東京ミッドタウン

自社媒体

- ・フジフィルム スクエア Webサイトユーザー数：654,093人
- ・Facebook、X(旧Twitter) 投稿件数：456件

主要メディア掲載

テレビ：「ノンストップ!」フジテレビ／新聞：朝日新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞、東京新聞、朝日小学生新聞、読売中高生新聞／写真・カメラ紙(誌)：隔月刊風景写真、CAPA、コマースナル・フォト、フォトコン／その他雑誌：月刊ギャラリー、月刊MOE、週刊文春、Stereo、モノ・マガジン／Webサイト：antenna、MdN、グノシー、CNET JAPAN、ZDNet Japan、毎日新聞WEB、Yahoo! ニュース、読売新聞オンライン、47NEWS、livedoorニュース

来館者、出展者から寄せられた声

フジフィルム スクエアには来館者からアンケートで感動の声が多く寄せられます。

また、出展者からも展示を通して発見したことや、来館者との交流についての感想など、たくさん声をいただきます。このように、フジフィルム スクエアで写真を通じて「こころ彩られ」、紡ぎだされた言葉の一部をご紹介します。

※お寄せいただいた声と写真の被写体の方は関係ありません。

〈来館者の声〉



ここに来て作品を見ていると、いつも感動があります。胸が熱くなり、涙がこぼれるときもあります。

印画紙に丁寧に焼き付けられた「写真」の力に圧倒されました。素人でも思いを持って撮ることが大事だなと思いました。

写真を撮ること、残すことの素晴らしさを改めて実感いたしました。

同時にいろいろな写真展が開催されているので、目的の写真展以外で新たな作品や作家との出会いがあるのがとても良いです。

作品を見るだけでなく、作家さんと直接お話しもできたので、うれしかったです!

展示内容が偏らず、若手やアマチュアの写真家を応援している姿勢や寛容さを感じます。

いつも安定して質の高い作品が展示されているので、常に新たな発見、感動があります。

コンシェルジュの方の丁寧な説明で大変有意義な時間を過ごせました!

企業メセナで無料!というのが素晴らしい!

〈出展者の声〉

最終的な展示作品の選定に関して、親身に相談に乗っていただき非常に助かった。プリントや額装についてもプロによる的確なアドバイスをいただき、勉強になった。プリントの色校正のとき、クオリティーの高さと美しさに驚いたことを今でも覚えている。

綿密に計画・準備でき、写真展会場では、イメージ通りの光景が作れました。シンプルでクリーンな空間に作品が整然と並び、改めて写真展の良さを感じます。清潔感があふれる会場で主催者も来館者も気持ちよく写真文化に触れることができたと思う。

私のことをこの写真展で初めて知った方、感動して何度も会場に足を運ばれた方、2時間もじっくりご覧くださいました。新聞記事を見て来館された方など、さまざまな方々との出会いがありました。自分の作品が皆さんの心に届いたと思うととてもうれしかったです。

家族連れのお客さまが多く来館され、子どもたちは会場を駆け巡り、見たことのない動物たちに目を丸くして興奮していました。迫力に満ちた高品質の銀写真プリントを見て、心の奥底に刻まれた印象が、後の人生に少なからずとも良い影響を及ぼすことができれば幸いです。

「銀塩フィルムで撮影した作品のプリントはいいね」と言われたときは、こだわり続けた甲斐があったと思い、うれしかったです。これからも銀塩フィルムにこだわって撮影を続け、写真展を開催したいです。

今回の作品の明るさや鮮やかさが銀写真プリントで一層際立つものとなり、本当によかったと強く感じた。東京ミッドタウンという好立地もあり、多数のお客さまにご来場いただいたことは、今後活動を続けるうえで、とてもよい励みとなりました。

インタビュー動画は、Webサイトでの公開と、会場での上映の両方で多くの方にご覧いただきました。Webサイトで動画を視聴し、動画内で取り上げられた作品を見たり、写真展に来場された方が大勢いらっしゃいました。このような反応から、作品だけでなく作者の思いや撮影の裏話などに興味を持つ方がたくさんおられるのだと感じました。

〈従業員の声〉

コンシェルジュが心を込めて写真の歴史を説明するフジフィルム スクエアは、グループ従業員であることが誇りに思える大切な場所です。

才能ある若手写真家の方を発掘するフジフィルム スクエアの活動は、日本の写真界にとって非常に大切だと思います。

いつも仕事帰りに立ち寄って、展示されている作品から多くの癒やしと明日への活力をもらっています。

毎回素晴らしい展示を行っており関係会社従業員として胸を張れる施設です。今後も魅力的な写真展企画を長く続けてほしいです。

日本の写真界をリードする写真展会場だと感じています。富士フィルムグループの従業員として誇らしいです。

素晴らしい写真と気軽に触れ合うことができるスペース。これからも写真文化の原点を守り続けてほしいです。



- ・本活動報告書の2022年度とは2022年4月1日～2023年3月31日を指します。
- ・本活動報告書に掲載されている「主要メディア掲載」および「ご来館者数」のデータは自社調査に基づくものです。
- ・「来館者数」は写真展期間中のフジフィルム スクエア全体のご来館者数の合計です。
- ・「来館者の声」および「来館者属性」は、2022年度に開催された写真展期間(2022年4月1日から2023年3月31日)に実施された自社アンケート調査に基づくものです。
- ・本活動報告書では、銀を含む化学薬品をゼラチンに溶かして塗布した写真用紙に、ネガフィルムなどを通して露光し、現像処理して得られる写真プリントのことを「銀写真プリント*」と表記しています。
*フィルム・デジタル画像を写真店やラボに依頼してプリントする、従来からの「写真(銀塩方式)」プリントを示す呼称
- ・本活動報告書に掲載されている写真は、新型コロナウイルス感染対策を十分に講じたうえで撮影しています。
マスク未着用の写真は撮影時のみマスクを外しています。
- ・年間を通じた写真展運営の協力会社は、下記のとおりです。
展示作業:株式会社フレームマン
展示物・告知物制作:富士フィルムイメージングシステムズ株式会社
運営協力:富士フィルムビジネスエキスパート株式会社

フジフィルム スクエア 2022年度 活動報告書

発行日:2023年10月

発行・編集:富士フィルム株式会社

コーポレートコミュニケーション部 宣伝部

〒107-0052 東京都港区赤坂9-7-3

発行者:松島大泉

デザイン:株式会社ラジアン

制作:株式会社ジョーメイ

©富士フィルム株式会社 禁無断転載

